

2021年度

アクティブ・ラーニング推進報告書

広島文化学園大学・短期大学FD委員会

目 次

1. はじめに	1
2. 令和3年度大学・短大FD研修会	2
1) 全学ICT事例発表会(大学FD・教育課程委員会合同研修会)	
2) 全学FD・SD障害学生支援に関する研修会	
3. アクティブ・ラーニング及びC-Learningを用いた授業紹介.....	30
4. 学生参画型FD活動	56
5. ラーニング/オープン・コモンズ利用状況 及びICT支援員の取組	64
6. アクティブ・ラーニング実施状況	69
7. おわりに	74
広島文化学園大学・短期大学FD委員会規程	75

1. はじめに

広島文化学園大学・短期大学 学長 坂越 正樹

令和2年1月、中央教育審議会大学分科会から「教学マネジメント指針」が提示され、そこでは、「学修者本位の教育の実現」が目標として掲げられています。この「学修者本位の教育」のための方策として重視されているのが、アクティブ・ラーニングです。本学では、このアクティブ・ラーニングの手法をいち早く取り入れ、「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修」ができるような教育環境を整備してきました。とりわけ、本学の教育・研究の基本方針である「対人援助」という観点からすると、アクティブ・ラーニングの手法である体験学習、発見学習、問題解決学習、調査学習などから、社会的能力、知識・経験などを含めた汎用能力を涵養することは欠かせません。本学の教育目標を達成するには、まさにアクティブ・ラーニングの手法による教育が必要だと考えています。

しかしながら昨年度に続き本年度もこのアクティブ・ラーニングの取組みが大きな制約を受けることになりました。新型コロナウイルス感染症の第5波、第6波の広がりにより、前期・後期とも学期後半の重要な時期に対面授業ができず、学修支援システム C-Learning 等による遠隔授業となりました。その結果、アクティブ・ラーニングの計画も学生が密になるグループワークを中止したり、対面でのプレゼンテーション、ディスカッションを断念したりする、また実習をシミュレーションに代えるという事態が生じました。

このように学修の障害は大きかったのですが、他方でアクティブ・ラーニングは本来「主体的能動的協働的な学び」であり、必ずしも対面であることが必須の条件ではありません。C-Learningの機能を活用すれば、ふだん発言の少ない学生の意見をクラスで共有することができます。事前に教材を登録することで学生の事前学習が可能になり、授業ではより深い考察に重点を置くことができます。またアンケートやレポートの機能によって、学生がその授業で何をどこまで理解できたのか、評価確認することもできました。さらに本年度は、テキストベースの C-Learning のみならず、受講生の Web 環境に配慮しながら同時双方向の Google Meet や Zoom、音楽学科授業では YouTube 配信等を活用する授業も多く見られました。

コロナ禍が、アクティブ・ラーニングを制約したことは事実ですが、また別の可能性を示してもくれたとも言えます。対面授業により、キャンパス内、教室内という空間と一定の時間を共有して学ぶことの意味は変わりなく重要です。また同時に ICT の機能を十分に活用すれば、非対面でも主体的で能動的な、さらには協働的な学びも可能になります。これこそ学修者本位の教育であり、学修者の個別最適な学びと学修者同士の協働的な学びの統合、ベストバランスへの方向性を示すものです。

ここに困難であった令和3年度のアクティブ・ラーニング推進報告書をまとめました。本報告書が、本学のアクティブ・ラーニングのさらなる飛躍の土台になることを願っております。また、本報告書をご一読のうえ、本学のアクティブ・ラーニングについて評価していただき、忌憚のないご意見を賜れば幸甚に存じます。

なお、本学は令和3年度に日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価を受審しました。機構による評価報告書は年度内に公表されますが、その中の「基準:教育課程」について、優れた点として「主体的・能動的・協働的な学びであるアクティブ・ラーニングを教育方法の改革として推進し、その実績を報告書としてまとめていることは評価できる」と講評いただきました。

2. 令和3年度 大学・短大 FD 研修会

- 1) 全学 ICT 事例発表会 (大学FD・教育課程委員会合同研修会) 8月20日 (金) 開催
大学・短大FD委員会委員長 山内 京子

コロナ禍における実習代替としての ICT 教育
—成人看護学実習における臨床推論能力の育成—

看護学部 看護学科 平岡正史

Web会議システム及びフリーソフトウェアを用いた研究指導

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 河野喬

C-Learningを活用した「セミナー I」の試み
—創作活動, コード進行について—

学芸学部 音楽学科 多田愉可

コンピュータ教材を利用して子どもへの学習支援技術を学ばせる
—LiveCodeを用いたプログラミングと教材作成—

学芸学部 子ども学科 河村 暁

アンケート集計結果

- 2) 全学FD・SD障害学生支援に関する研修会 12月22日 (水) 開催

発達障害について —充実した学生支援のために—

学芸学部 子ども学科 河村 暁

アンケート集計結果

全学 ICT 事例発表会（大学 FD・教育課程委員会合同研修会）

大学・短大 FD 委員会 委員長 山内 京子

令和 3 年度の大学 FD・教育課程委員会合同研修会として、2021 年 8 月 20 日（金）13:00～14:30 の時程で標記の発表会をオンライン形式で開催致しました。

各学部学科からの実践報告を大学 4 学科各 15 分の発表と、5 分の質疑応答を受けました。看護学科からは平岡正史先生「コロナ禍における実習代替としての ICT 教育—成人看護学実習における臨床推進能力の育成—」、スポーツ健康福祉学科からは河野喬先生「Web 会議システム及びフリーソフトウェアを用いた研究指導」、音楽学科からは多田愉可先生「セミナーにおける C-Learning を活用した旋律創作の試み」、子ども学科からは河村暁先生「コンピュータ教材を利用して子どもへの学習支援技術を学ばせる—Live Code を用いたプログラミングと教材作成—」の 4 演題を発表、コロナ禍の学修環境下における興味深い取組み・工夫について、各学科の教育内容・特色を反映した報告がなされました。

全学 FD・SD 障害学生支援に関する研修会

大学・短大 FD 委員会 委員長 山内 京子

令和 3 年度の全学 FD・SD 障害学生支援に関する研修会を 2021 年 12 月 22 日（水）11:00～11:30 の時程でオンライン研修会「発達障害について～充実した学生支援のために～」と題して開催致しました。

企画の趣旨としては、学内教職員からの「発達障害と言われる特性のある学生には違いがないが、どう対応してよいか分からない」等、発達障害の理解に関するニーズの高まりを受けての講演会開催です。特に、この領域に関して見識の深い子ども学科の河村暁先生は脳科学の研究成果に基づき、実際に発達障害のある子どもたちへの指導実践を重ねておられます。中々分かりにくい実際の場面を、理解し易い言葉や表現で、講演頂き、あっと言う間の 70 分弱の講演会でした。全学的に障害学生に対する理解を深める第一歩となる貴重な研修会でした。



コロナ禍における実習代替としての ICT 教育 —成人看護学実習における臨床推論能力の育成—

看護学部 看護学科 平岡正史

はじめに

コロナ感染拡大に伴い、臨地での実習が困難となっただけでなく、学校での代替実習も不可能となったことからリモートでの実習を余儀なくされた。リモート実習においては、当初目標として掲げていた内容を変更し、評価のあり方も読み替えが必要になった。今回、本学成人看護学リモート実習で不慣れながら ICT 機器を用いた実践の様子を紹介する。

1. 成人看護学実習の目標

通常 1 人の患者を 1 人の学生が受け持ち、以下の目標を達成すべく指導している。

- 1) 受け持ち患者の健康レベルを踏まえた情報収集・アセスメントができる
- 2) 成人期の特性を踏まえた患者の看護問題を明確にできる
- 3) 患者の個別性を踏まえた看護計画が立案できる
- 4) 援助計画に基づいて看護実践ができる
- 5) 実践した援助の評価・修正ができる
- 6) 看護専門職者として人間関係を形成し、研究的・倫理的態度で臨む

2. リモート実習で使用した機器など

- 1) C-Learning 学習支援システム：患者の情報源として模擬電子カルテを EXCEL で自作し、定期的に情報を更新したものを共有した。
- 2) Google Meet ビデオ会議ツール：学生と教員が個別で話し合ったり、グループミーティングをするなどした。また、ライブで配信し直接模擬患者と対話や援助できる機会を設けた。
- 3) デバイス：ノート PC、WEB カメラ、スマートフォン、ウェアラブルチェストハーネス（右下の写真）など
- 4) 病室環境を模した実習室の什器・備品
- 5) 看護師役、患者役、臨地指導者役、カメラマン役の教員
- 6) 看護シミュレーター（高機能モデル人形）
- 7) 患者に留置される点滴やカテーテル、酸素マスクなど



3. リモート実習を行う上で工夫した事項

- 1) 実習スケジュール：臨地実習の様に出来るだけリアルな患者設定・ストーリーとし、病状の経過を感じられるようにした。教員は、患者役や看護師役など何役もしながら指導した。また、学生を放置する時間を極力少なくするため、教員が役割分担しながら実施した。
- 2) 患者設定・ストーリー：患者事例は、実習病院や病棟の特徴、国家試験頻出疾患、実習目標、押えておきたい病状の変化などを考慮した。本実習では手術患者を受け持つことが多

いことから、患者を術前から退院まで通して受け持つ設定とした。しかし、複数の学生が同一の患者で展開するため、学生間で情報共有をしないルールが必要であった。

- 3) ペーパーペイシエントでの展開との差別化：患者は個性的で人間味のあるキャラクターを設定した。Google Meet を活用して直接対話できる機会を設け、知りたい情報を聞くことができるようにした。疾患に詳しい教員が患者役をし、できるだけリアルに表現した。これにより、模擬電子カルテから得られない患者の思いや状態が把握でき、患者に合った援助につながったと考える。また、自分の受け持ち患者であるという実感を持つことが、患者の三側面を捉えることにつながったと考える。さらに、こまめに情報を更新することで刻々と変化する患者の状態が把握でき、ペーパーペイシエントとは異なる臨場感と緊張感を持たせた。
- 4) 看護実践の評価方法：学生が手足を動かして直接患者に援助することはリモート実習では不可能である。したがって、リモート実習における実践は教員がアバター(分身)となり患者に実施することであり、学生の発言内容を「実施」に置き換えることが評価方法のひとつといえる。したがって、学生の発言内容や量、コミュニケーションを交わす際の着目点や患者の問いや相談などへの対応が理解度や実践力の評価の材料となった。

4. リモート実習における ICT 教育の有効性と課題

- 1) リモート実習終了後の学生の学びのレポートから、「ディスカッションから自分が考えていなかったことや自分とは異なる意見が出て学びになった」や「他の人の意見を聞くことで、個別性のある看護について考えることができた」、「メンバーの意見を聞くことで、自分の視点と同じ、または異なる視点もあり新しい発見ができた」といった意見があった。
- 2) 実習目標の達成に適した患者設定が可能であり、模擬電子カルテを更新したり動画を配信することで刻々と変化する患者を表現することが可能な点で有効であった。学生の理解状況や実践レベルをグループワークやディスカッションでの発言を通して確認でき、臨床推論能力の育成にも活用可能と思われた。さらに、実習開始日に入院、実習期間中に手術～退院の一連のプロセスを体験できるのが理想だが、このような都合の良い患者は実際にはいない。しかし、リモート実習では限られた実習期間を最大限に活かしたストーリーが作成できる点で有用と言える。
- 3) 一方でリモート実習の課題として、カルテ更新、動画撮影に多くの労力が必要であることや学生の ICT 環境によっては学習効果に差が生じる可能性があった。また、学生が五感を使った観察や臨場感が得られるような工夫が必要と考えた。その他、グループの一体感や時間外の雑談などを通じたインフォーマルな関係構築の機会が得られにくいことも今後の課題である。

おわりに

リモート実習には限界があるが、短所ばかりではなかった。対面よりも画面を介したディスカッションの方が活発になるといった一面もあった。コロナ禍の実習のあり方を模索しながら臨地実習や対面実習、リモート実習を運営し、それぞれの特徴や有効性を実感できた。今後はこれらの長所を積極的に取り入れ、より良い実習展開を検討していきたい。

Web 会議システム及びフリーソフトウェアを用いた研究指導

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 河野 喬

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大によって従来の大学教育が難しくなり、遠隔授業及び学内実習等の代替手段が取られた。しかし、双方向かつ個別的な関わりを要する研究指導においては、学生の置かれている学修環境に配慮する必要があるため、試行的な取組として表題の仕組みを取り入れることを検討した。検討する上で課題だと思われたのは、次の4点であった(表1)。

表1 コロナ禍における研究指導の課題

- | |
|--|
| (1) 学内の教育資源が使えない(図書館, PC とくに統計ソフトウェア等) |
| (2) 学生間のグループダイナミクスが活用できない(研究アイディアの交換等) |
| (3) 調査・実験がしにくい |
| (4) 論文指導・査読がしにくい |

2. 課題への対応

(1) 学内の教育資源が使えない

オープンアクセス誌が増え、機関リポジトリの整備が進んだ時代であることから、人間健康学部では図書館ガイダンスに加え、初年次教育等で文献検索指南を行っている。今年度3年生となり当セミナーに配属された学生には、改めて文献検索の確認と演習を行い、併せてフリーソフトウェアをつかった分析方法を教授した。使用したのはHAD(清水, 2016)とKH Coder(樋口, 2020)である。Excel上で動かすファイル配布型の無償プログラムであるHADは、統計ソフトウェアSPSS本体及び各種パッケージでできることは、ほぼ可能である。Office 365を使うことができるHBG学生にとって使用しやすいと考えた。KH Coderは計量テキスト分析を手軽に学び取り組むことができる。質的研究を希望している学生にとって有用なツールとして使用した。



(2) 学生間のグループダイナミクス

セミナー学生が研究指導の時間に集うことができなかつたため、学生個々人の研究活動の進捗を共有し、相互に刺激を与えあいながら積み上げる方法を検討した。その一つとして、先行研究のレビューを課題とし、文献リストを毎週更新して共有するサイクルを15週にわたって行った。結果として、2021年度前期15週で、144本の文献データベースを共有し、それを基に各学生の研究計画の作成が行われた。

(3) オンラインアンケートと研究倫理申請

新型コロナ禍による調査・実験の制限に対して、やむを得ず Google フォームや SNS を用いた調査を容認した。但し、対人援助専門職になることが期待される学生たちであるため、人を対象とした研究に求められる倫理的配慮の意義と仕組みを学ばせることに留意した。オンラインでアンケートを行う場合には、必ず研究倫理審査を受けるように指導・支援を行い、その過程で、個人情報保護、調査協力における任意性の徹底、及び結果の公表の重要性について教示した。

(4) 遠隔による論文指導・添削のサイクル化

遠隔による論文指導・添削の手順は表 2 のとおりである。遠隔のため、通常の添削では学生にとって過度に否定的に捉えられる危険性があると考え、丁寧なコメントとポジティブな表現を心がけた。

表 2 遠隔による論文指導・添削の手順（サイクル）

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 学生には HBG メールでの卒業論文テキストファイルの添付提出を指示(2) 教員は卒業論文テキストをプリントアウトして赤ペンで添削(3) 教員は添削済原稿をスキャナーで pdf として取り込み、学生アドレスに添付返信(4) 学生は着信した pdf をもとに卒業論文を修正加筆し、(1) に戻る |
|---|

(5) 離れていても「対話の教育」

文字のみでのやり取りで終始することは、孤立傾向にあるといわれるコロナ禍の大学生にとって望ましくないと考えた。そこで、オフィスアワーをオンラインで行うことを計画した。但し、Web 会議システムである ZOOM を使用しただけでは、学生からの任意のアクセスは期待できず、アクセスを強制すべきものでもない。そこで、広島県社会福祉士会と連携し、実践現場で業務にあたる現職ソーシャルワーカーを招いて、就職・キャリア支援につながる話を織り交ぜつつ、学修・研究のモチベーションアップを企図したオンライン・ミーティングを週 1 回の頻度で開催した。現職のスクールソーシャルワーカー、相談支援専門員、生活支援コーディネーター等が参画し、学生にとって有用な時間となった。

3. 結果と考察

新型コロナ禍における双方向性・個別性を確保した研究指導を企図して行った効果については、定量的な測定・分析を行っていないため定かではない。しかし、次のような好影響は残せたのではないかと考える（表 3）。

学生たちの進路先として考えられる保健医療福祉機関では、SPSS や SAS などの有償ソフトウェアを導入することには予算面で制限が及ぶ。その一方で、福祉現場における定量分析のニーズの高まりは事実としてある。ディプロマ・ポリシーに掲げる到達点として、学生がその後プロとして自己開発し続けられる土台を築けるよう指導・支援することが求められる。卒業後も費用を気にせず使い続けられるフリーソフトウェアとその使用方法を教示することで、引き続き根拠を基に考えられる人材育成、分析を厭わない姿勢を育むことができたように思われる。

また、学生一人では収集できない量及び質の文献レビューが可能となった。これまでは、個々の学生がそれぞれのスピードで進めていた先行研究の収集作業が、これにより集団の取り組みに発展した。当初は、同じような文献を複数の学生が提出・報告するということが日常茶飯事であったが、収集結果について毎週総評を行ったことで、学生それぞれの問題意識や研究目的が徐々に明確となり、報告する文献が重複するようなことが少なくなり、エビデンスレベルの高いものが含まれるようになっていった。学生一人ひとりが多くの文献、先行研究に触れることができる一年となったように思われる。

そして、外部の専門職・先輩とのオンライン交流の機会は、現職のソーシャルワーカーの問題意識や職務内容といったリアルに触れる貴重な体験となった。社会人院生として研究を進めている現職もおられ、学生に「研究は学生時代では終わらない」を認識させることができた。

さらに、遠隔研究指導を採用したことで送受信記録を残しながら研究指導が展開していったことで、送受信記録を基に学生自身にとっても成長が可視化され、モチベーションの維持・向上につながったように思われる。

表3 遠隔研究指導の効果とみられるもの

- | |
|----------------------------------|
| (1) フリーソフトウェアの活用上達 (卒後継続して使用可能) |
| (2) 多くの幅広い分野の文献に触れる経験と書き方のイメージ強化 |
| (3) 人を対象とする研究への慎重さ・倫理観の向上。 |
| (4) 外部の専門職・先輩との交流 |
| (5) 着実な論文指導と成長の可視化 |

4. 結論

新型コロナウイルス感染症の拡大防止を行いつつ、質を担保した研究指導を行うべく遠隔による教育方法を実施した。その結果、フリーソフトウェアの活用、効率的な先行研究レビューの遂行、研究倫理に関する具体的な指導、外部の実践者との交流機会とモチベーションアップ、着実な卒業研究論文の作成といった活動が行われた。卒業研究だけではなく、大学教育においては対面方式こそが基本であり、これに勝るものは無いと考える。安易な省力化の手段としてではなく、学生にとって効果的な学修方法として遠隔教育は存在するべきであろう。そのため、アフターコロナに至ったあと、全面的に対面授業に復帰したときにでも併用できる教育方法として、遠隔教育をさらに研究していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. *メディア・情報・コミュニケーション研究*, 1, 59-73.
- 2) 小宮あすか, 布井雅人 (2018). 『Excel で今すぐはじめる心理統計: 簡単ツール HAD で基本を身につける』講談社.
- 3) 樋口耕一 (2020). 社会調査のための計量テキスト分析: 内容分析の継承と発展を目指して第2版, ナカニシヤ出版.

C-Learning を活用した「セミナー I」の試み —創作活動, コード進行について—

学芸学部 音楽学科 多田 愉可

1. 音楽学科における ICT の活用

(1) C-Learning の活用

基本的には対面授業が不可欠となる音楽学科では、遠隔授業による授業内容については検討されるべき課題が多い。まず、音をリアルタイムで届けられなければならない。実技レッスンは言うまでもなく対面レッスンの様な音のやり取りは遠隔では難しい。そして、音の質である。演奏に必要な多彩な音色など細かなニュアンスは対面でのみ伝えられると考える。とは言え、ICT を補助的に活用し、譜読み段階の間違いの指摘、音楽理論や創作活動に限れば、対面以上に学生の理解につながる可能性もあり得ると考える。

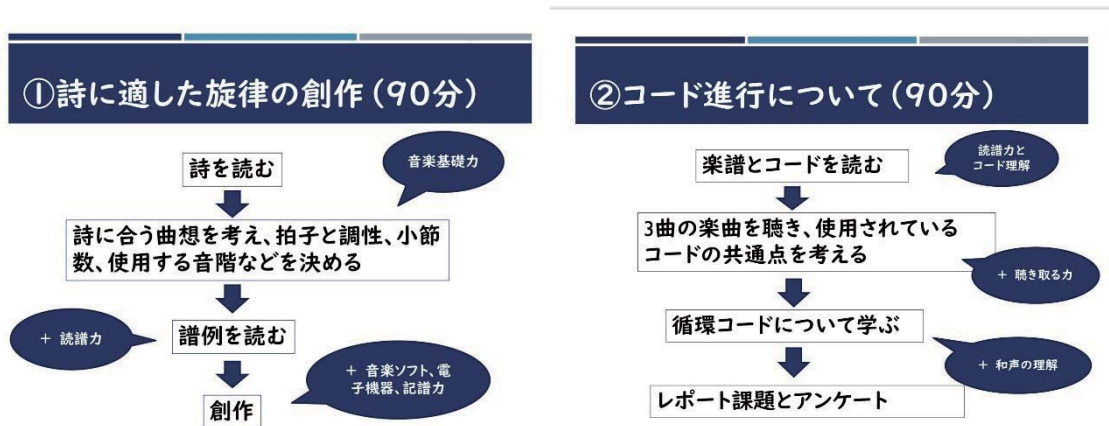
(2) 「セミナー I」における C-Learning の活用

2 年生を対象としたクラス授業である「セミナー II」では通常、グループワーク等対面で行うべき内容となっていたため、C-Learning による遠隔授業に切り替えられたことで、急遽内容を「創作活動」と「コード進行」を中心に行うこととした。主には音楽ソフトを使用した楽譜の作成を目指していたが、普段から使い慣れている学生とそうでない学生の差が顕著であった。また授業終了時に行ったアンケート調査の結果、C-Learning でパソコンやタブレットを使用している学生が思いの外、少ないことがわかった。



2. C-Learning による創作活動の試み

本来、創作活動は和声の知識に頼るところが大きく、それなりの準備が必要となる活動ではあるが 90 分の中で簡単な旋律の創作を課題とした。金子みすゞの「わたしと小鳥と鈴と」の詩に旋律をつけ、提出方法は楽譜制作ソフト「ミューズスコア」を無料ダウンロード、あるいは手書きの五線譜を PDF で提出することを指示した。スマートフォンで C-Learning を受講している学生が多く、手書きの五線紙を PDF にして提出した学生が多く見られた。その中で、グランプリ作品を選び、2 週目の冒頭で音源として発表した。



3. C-Learning によるコードの理解

金子みすゞの「わたしと小鳥と鈴と」の詩に、ある楽曲の循環コードを模倣し、筆者が旋律を創作したものを例に旋律とコードの関係をまずは旋律譜で読んでもらった。その後に音源として聴いてもらい、既成曲3曲を例に共通する循環コードについて学ぶ内容とした。ICT環境を整えることにより、学生自身が創作した旋律を音源としてファイルにするところまで目指すことができればより充実した活動になるが、今回は音楽学科ボーカル担当の藤井雄介准教授の協力を得て、多重録音による音源データを教材として使用することができた。音源データは学生たちに理解しやすく、大変好評であった。コードについては教員採用試験の問題としても出題されている。アンケートにもあるように音楽学科2年生の半数以上がコードを理解できていないことがわかった。早い段階からC-Learningなどを活用し基礎的な知識を繰り返し学習することが重要である。



小学校においてもプログラミング教育が必修化され、中学校、高等学校の音楽の授業では音楽ソフトが使用されている。今後ますますデジタル教材の充実は必須であり、音楽教育の変革の時代を迎えていると考える。

コンピュータ教材を利用して子どもへの学習支援技術を学ばせる -LiveCode を用いたプログラミングと教材作成-

学芸学部 子ども学科 河村 暁

1. 特別支援教育におけるコンピュータ教材

(1) 障害と学習支援

障害のある子どもでは認知特性に応じた支援を行うためにコンピュータ教材が適していることがある。コンピュータ教材は子どもが注意を集中・持続させやすく、実物の教材教具やプリント教材とは異なる利点がある。教員を志望する学生が支援技術の一つとしてコンピュータ教材を利用できることは重要である。

(2) LiveCode とは

スコットランドのソフトハウスが開発したプログラミングソフトであり、Win, Mac, Linux, iOS, Android といったさまざまな OS に対応したアプリケーションを作成することができる (LiveCode, 2022)。古くからコンピュータ教材の開発に用いられてきたオーサリングソフト HyperCard (e.g., 東原ら, 1992) の強い影響下に作られている (Arnaud, 2013) ので、HyperCard の経験者は LiveCode にすぐに熟練できる。LiveCode によって障害のある子どもの認知特性に応じたコンピュータ教材を比較的用意に作成することが可能である (図 1)。

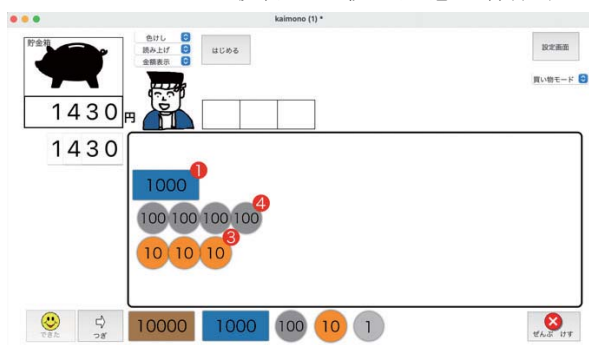


図 1 コンピュータ教材の例 (数概念の学習)

2. 授業中でのコンピュータ教材の活用

LiveCode では日常英語に近い言語でプログラミングを行えるが、支援経験もプログラミング経験もない学生が一から実用的なコンピュータ教材を作成することは難しい。授業内でコンピュータ教材について学ぶ実行可能なやり方は、すでに作成されたコンピュータ教材を学生のコンピュータにダウンロードしてその使い方を習得することである (図 2)。そのためにコンピュータ教材には誰でも内容をアレンジできるように設定画面を用意しておく必要がある。図 1 のコンピュータ教材に表示する内容は図 3 のように別の画面でドラッグ&ドロップの操作で変更することができる。学生は教材の内容の変更を通じて子どもに応じた支援について学ぶことができる。



図2 授業でのコンピュータ教材の使用

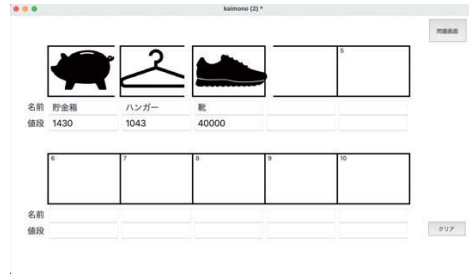


図3 数概念の学習の設定画面

3. なぜLiveCodeによるコンピュータ教材を授業で用いるか

すでに市販されている既存のコンピュータ教材を用いずにLiveCodeを用いて自作した教材を授業で学生に学ばせることには、次のような問題を解決できる利点が考えられる。第一に既存の教材は個々の子どもの特性に十分に合ったアレンジができない場合がある。第二に著作権や料金の問題が発生する可能性がある。第三に授業に応じた形に教材を修正できない場合がある。また教員自ら作成したコンピュータ教材で学ぶことは学生のモチベーションを高めることになるだろう。LiveCodeは3Dを扱うには適していないが教材を簡単に作成することができる上に、教材を動作させているときにその場で修正可能なほど即応性が高い。授業でコンピュータ教材を学習するときにも適していると考えられる。また図4に示すようにLiveCodeによって作成できる教材は多様であるので既存の教材が存在しない様々な領域における学習支援の方法を学ぶことができる。



図4 LiveCodeによって作成した教材例(左：分度器教材、中央・右：漢字書字教材)

謝辞 発表後に看護学部金澤寛先生からご助言いただき、教材を学生の所有する各コンピュータにダウンロード・動作させることが可能になりました。心より感謝申し上げます。

【文献】

Arnaud. (2013): <https://livecode.com/opensource-livecode-is-next-generation-version-of-hypercard/> (参照 2022-2-26)

東原文子, 東原義訓, 前川久男, & 大塚玲. (1992): 計算ストラテジーの習得とスピードアップをめざす障害児のためのコースウェア. 日本科学教育学会研究会研究報告, 6(4), 5-8.

LiveCode. (2022): <https://livecode.org> (参照 2022-2-26)

アンケート集計結果

1. 参加者数 63名

① 各キャンパス内訳

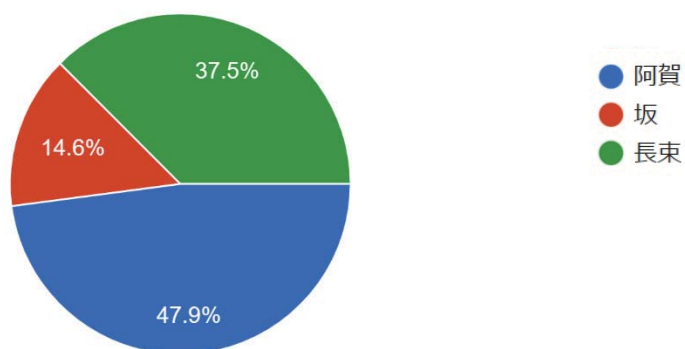
キャンパスの別	参加者数
長東キャンパス	18名
坂キャンパス	8名
阿賀キャンパス	37名

2. アンケート結果

アンケート回答数 48名

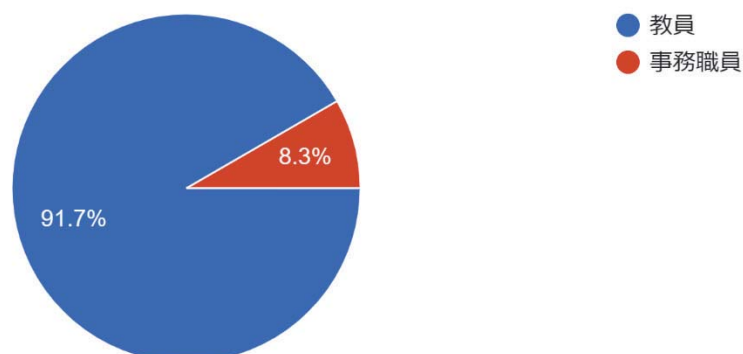
(1) 所属 (以下の選択肢からお選び下さい)

48件の回答



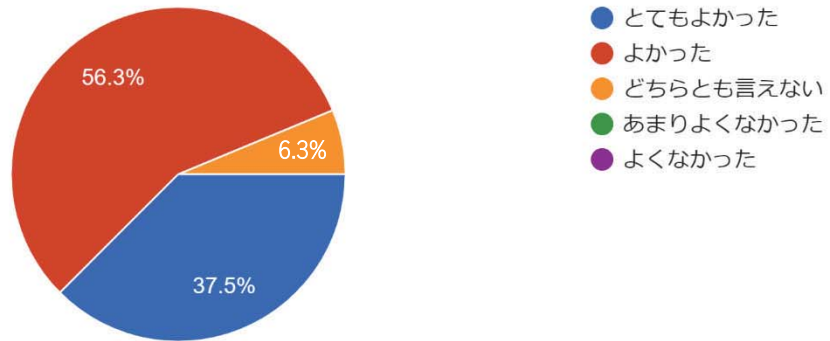
(2) 教職員の区分

48件の回答



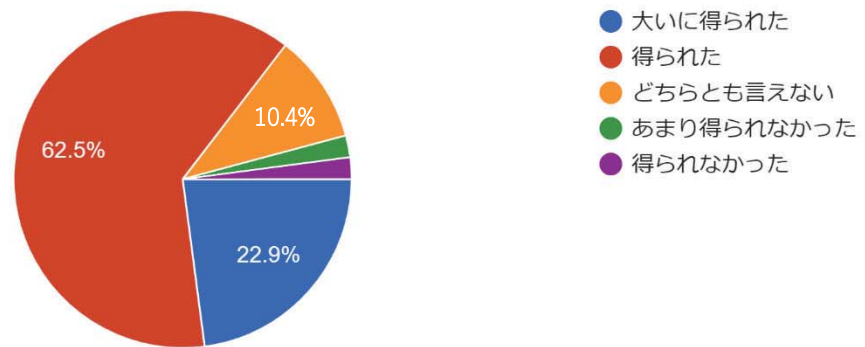
(3) 実践報告の内容はいかがでしたか

48件の回答



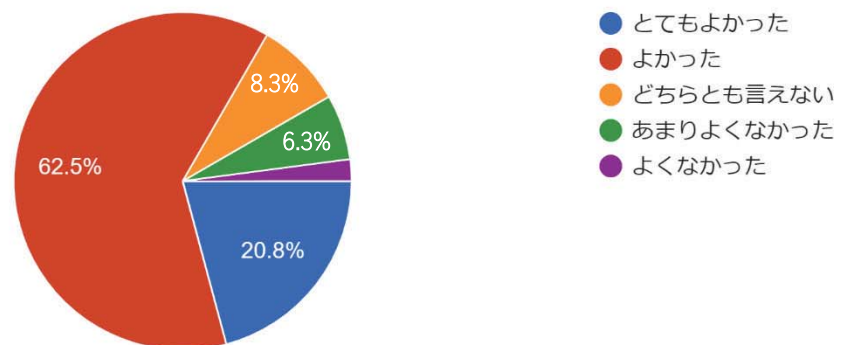
(4) 今後に生かせそうな情報やアイデアが得られましたか

48件の回答



(5) 進行・スケジュールについてはいかがでしたか

48件の回答



(6) 改善した方がよいと思われることがありましたらご記入下さい

- ・質問が出やすい工夫（しやすい雰囲気）
- ・オープンキャンパスの直前の金曜日は避けていただく方が良いのではないかと思います。
- ・ライセンス数の問題もあるかもしれないが、オンライン開催であれば、それぞれで参加させてもらえるようになると資料がしっかり見られていいなと感じました。
- ・専門が違くと、理解できる内容も異なるため、全てが役立つとは言い難い。それぞれの専門で深める機会があっても良いかもしれない。
- ・コロナ禍のなかでオンラインでの研修でしたが、今後もオンライン研修を希望します。
- ・コロナ禍、会場に集うことなく、各自がパソコンで参加できるようにした方がいい
- ・この度、他学科の先生の発表からも学ぶことが多かったです。ありがとうございました。改善点があるとすれば、もっと学びの共有や質疑応答ができるように、チャット機能の活用や、リアクションやプレイクアウトして少人数で話ができるように TEAMS を使うなど、FD 委員の方々がもっと ITC を活用できるように学習やサポートが必要だと思いました。
- ・ICTの研究なのに ICT を活用しきれていないのはいかがなものか。また、本来の意味での ICT としての研究事例や活用事例だとしても 個人負担で今回行っている部分が多く、大学として導入活用事例や 方向性をもっと研究して導入・活用すべきだと思います。
- ・感染予防の見地から、全員 web 可能にしていきたい
- ・あらかじめレジュメを配布されると、理解が進み、質問もしやすいと思います。
- ・対面授業の長短 遠隔授業の長短 それを踏まえたコロナ禍での授業の模索 必要なアプリは何なのか具体的に知る必要がありそう。（今後、学生にパソコンを用意させる前提として）
- ・可能であれば、事前に資料が見られると理解も深まると思います。
- ・活発な質疑応答への段取り
- ・ギリギリの仕事をしている自分の責任ですが、日程的に成績締切日は辛かったです。
- ・資料は事前にダウンロードできるようにしてあると、理解しやすかったと思いました。
- ・よかったので、特にありません
- ・資料が手元にある（見られると）とよりよかった。
- ・ローテクとハイテクのバランスのよい活用法について学ぶことができました。
- ・Web なので、聞き取りにくい面もありましたが、対面でなくても十分研修が行えることが実感できましたので、今後もうまく併用して、実施されたらと思います。

全学FD・SD障害学生支援に関する研修会

発達障害について —充実した学生支援のために—

学芸学部 子ども学科 河村 暁

1. 障害学生支援

(1) 大学で学ぶ障害学生

全国の大学において学ぶ障害学生の割合は1%を占め、令和2年度には35000人程度が在籍している(独立行政法人日本学生支援機構, 2013)。また発達障害のある大学生も平成24年度から平成30年度にかけて3倍程度増加しており、入学前の情報提供、受験時、授業等、就職活動等での支援が求められている(総務省, 2020)。少子化の中で義務教育段階における特別支援教育の対象となる児童生徒数も増加傾向にあり(文部科学省, 2019)、改正障害者差別解消法において民間事業者においても2024年までに合理的配慮の提供が義務化されたことから、今後も大学における障害学生支援はますます重要なものになると考えられる。

(2) 発達障害とは

発達障害としてLDやADHD、自閉症が広く知られている。しかし発達障害の用語の示す範囲はWHOのICD-10に基づいており、発達性協調運動障害や吃音、場面緘黙など多くの障害を含むものである(文部科学省, 2007)。

2. ワーキングメモリと発達障害

大学生の学習の問題に関わる様々な特徴として学習に関心がない(ように見える)、約束、持ち物を忘れる、漢字の使用が極端に少ない・間違える、よくしゃべるが語彙が少ない、作文が極端にできないなどがある。これらの特徴を理解し支援につなげるために以下にワーキングメモリの概念を述べる。

(1) ワーキングメモリとは

ワーキングメモリとはさまざまな課題の遂行中に一時的に必要となる記憶であり、そうした記憶の機能やメカニズム、それを支えている構造を指す(齊藤・三宅, 2014)。Baddeley et al. (2011)のワーキングメモリのモデルでは言語領域と視空間領域、情報の保持と処理+保持、短期の記憶と長期の記憶の要素が示されており、これらの観点は発達障害のある学生の支援に役立つと考えられる(その基本的な説明は河村(2021)に譲る)。言語領域と視空間領域は学習の異なる側面にそれぞれ相対的に強く関与すること、情報の処理+保持の側面は学生が講義で学んだばかりのことを覚えていないことを説明できる。長期の記憶の側面は学生が興味のあることには力を発揮しやすく、興味が無いことや新しい知識について学びにくいことを説明できる。ワーキングメモリのテストの得点は年少から青年期へと向上し、そこを一つの頂点として緩やかに下降するが、読み障害のある人ではどの年齢でも成績が低いことが知られている(Siegel, 1994)。

(2) 大学生での学習の困難

大学生での学習の困難はキャッチアップするなどして観察上わかりにくいものになっている

ことがある。例えば完全に読めない訳ではなく読むのが遅い、あるいはある程度慣れた文は読みやすく初めての文章を読むことが苦手など、一見分かりにくい症状になっている場合がある。また語彙が少ないと読めてはいても内容を理解できていないことがあるように、観察される特徴からその困難を推測することに難しさがあることにも注意が必要である。

3. どのように支援するか

(1) 適応的アプローチ

ワーキングメモリに弱さのある大学生に対しては、弱いところを強くしようとする治療的アプローチよりも、強さも弱さも含めた今ある特性を生かす学習を進める必要がある。その際に合理的理由に基づいた指示を行うと理解しやすいことがある。例えば講義中はスマートフォンをかばんにしまうよう要求する時「失礼だから」「決まっているから」といった理由に基づくよりもスマートフォンが手元にあるとワーキングメモリの働きが弱くなるようなデータ(Ward et al., 2017)を見せる方が効果的であると考えられる。また作文の支援では話題の想起、書く順番の決定、文を増やすのように、手順をスモールステップに分けて1つの時間に1つの作業に取り組むほうが取り組みやすいと考えられる(河村, 2019)。

(2) 算数障害

まだまだあまり知られていないが大学生への支援の際に算数障害についての知識も必要である。知的発達に遅れはないが計算に障害のある人がおよそ5%程度おり、算数障害と呼ばれる(e.g., Butterworth, 2018)。大人でも指計算をしているが隠していて観察できない場合があるので注意が必要である。「あと20分」のような時間感覚がわかりにくい場合がある。

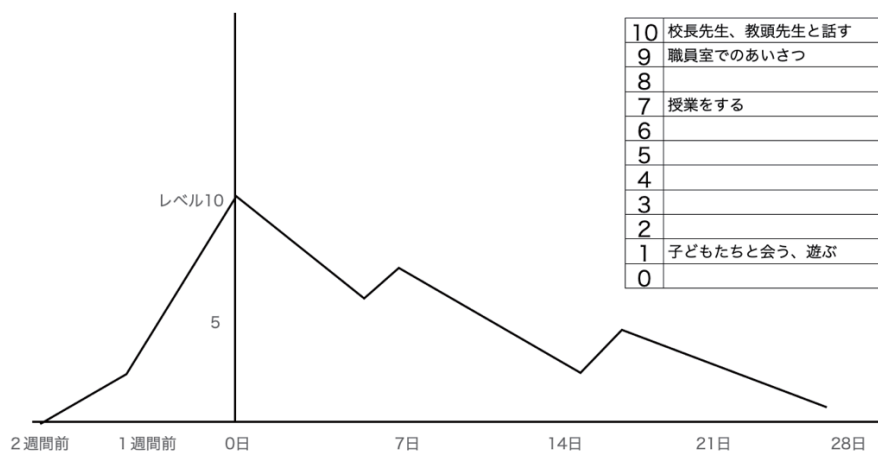


図1 時系列に沿った不安度のグラフ化と不安階層表の例

(3) 不安症

授業参加や実習参加の難しさに関連して不安症についての知識も必要である。扁桃体の過活動を前頭前野が十分に抑制できないメカニズムが考えられており(e.g., Gorman et al., 2000)、

心の弱さ、やる気不足や経験不足によるものではないこと、困難を乗り越えれば克服できるものでもないということを理解する必要がある。不安に対しては新規の場面に対して絵や文字などで予定と何が要求されるかをあらかじめ学んでおくことは重要である。また不安階層表によって何が不安なのかを明確にして不安の低いものから取り組むことで取り組みやすくなり、不安度を時系列にそってグラフ化して振り返ることで次の機会における不安の軽減を予期しやすくなると考えられる(図1)。不安が高まるとワーキングメモリも制約され、より一層パフォーマンスが下がると予想されるため、さまざまな困難は互いに関連しあっており、支援は一つの観点だけでなく複数の観点に基づく必要のあることが分かる。

4. おわりに

日本語では文法構造上「障害者」と表現されるが英語では Person with disabilities の表現がなされ、障害はその人を代表するものではなく属性の一つであることが明確に示される。このような People First Language の考え方は、障害学生支援を行うとき「障害」と向き合うよりもまず「人」と対話するものであることを表している。障害学生支援においても一方的な指示、教授に終わるものではなく互いに高め合う関係性こそが重要であると考えられる。

【文献】

- Baddeley, A. D., Allen, R. J., & Hitch, G. J. (2011). Binding in visual working memory: The role of the episodic buffer. *Neuropsychologia*, 49(6), 1393-1400.
- Butterworth, B. (2018). *Dyscalculia: From science to education*. Routledge.
- 独立行政法人日本学生支援機構. (2021): 障害のある学生の就学支援に関する実態調査.
https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/index.html (参照 2022-2-26)
- Gorman, J.M., Kent, J.M., Sullivan, G.M., & Coplan, J.D. (2000). Neuroanatomical hypothesis of panic disorder, revised. *The American journal of psychiatry*, 157(4), 493-505.
- 河村暁(2019): ワーキングメモリを生かす指導法と読み書き教材—学習困難な子どものつまずき解消!. 学研プラス.
- 河村暁(2021): 教室の中のワーキングメモリ. 明治図書.
- 文部科学省. (2019): 日本の特別支援教育の状況について.
https://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/2019/09/_icsFiles/afieldfile/2019/09/24/1421554_3_1.pdf (参照 2022-2-26)
- 文部科学省. (2007): 別紙2 発達障害者支援法等で定義された「発達障害」の範囲図.
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2015/10/06/1243499_001.pdf (参照 2022-2-26)
- 齊藤 智・三宅 晶 (2014) 実行機能の概念と最近の研究動向. In 湯澤正通・湯澤美紀 (編著) ワーキングメモリと教育, 北大路書房, pp27-45.
- Siegel, L. S. (1994) Working memory and reading: A life-span perspective. *International*

Journal of Behavioral Developmet, 17(1), 109-124.

総務省. (2020) :障害のある学生等に対する大学の支援に関する調査-発達障害を中心として-.

https://www.soumu.go.jp/main_content/000674070.pdf (参照 2022-2-26)

Ward, A. F., Duke, K., Gneezy, A., & Bos, M. W. (2017). Brain drain- The mere presence of one' s own smartphone reduces available cognitive capacity. Journal of the Association for Consumer Research, 2(2), 140-154.

アンケート集計結果

1. 参加者数 177名

① 学内の参加者数 162名

キャンパスの別	参加者数
長束キャンパス	75名
坂キャンパス	34名
阿賀キャンパス	53名

② 学外の参加者数 15名

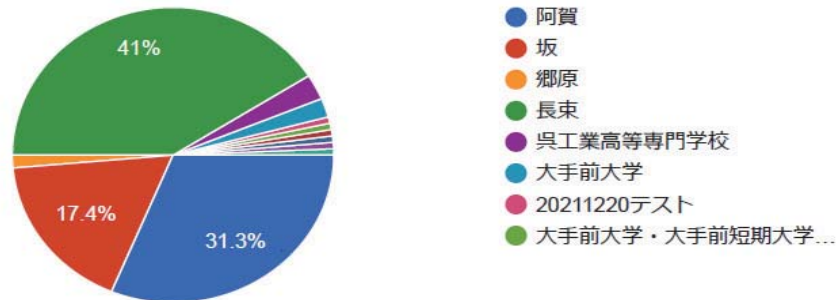
大学の別	参加者数
呉工業高等専門学校	7名
大手前大学	8名

2. アンケート結果

アンケート回答数 114名

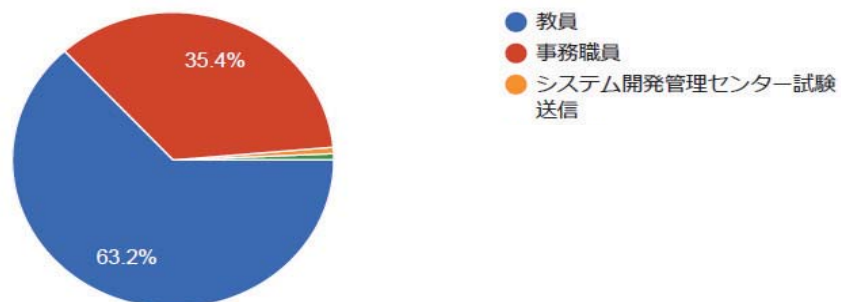
(1) 所属 (以下の選択肢からお選び下さい)

144 件の回答



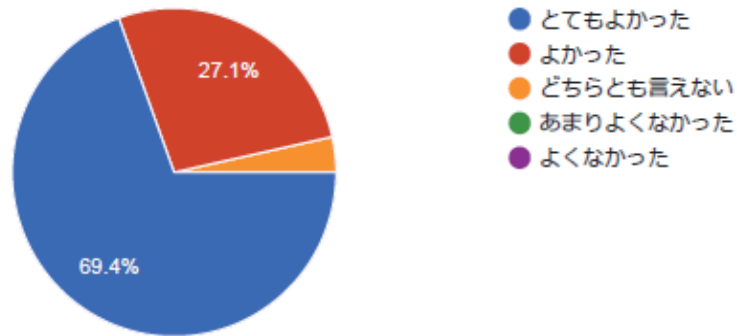
(2) 教職員の区分

144 件の回答



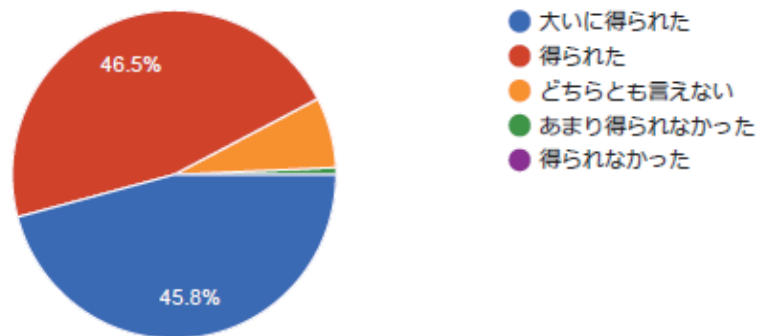
(3) 研修の内容はいかがでしたか

144 件の回答



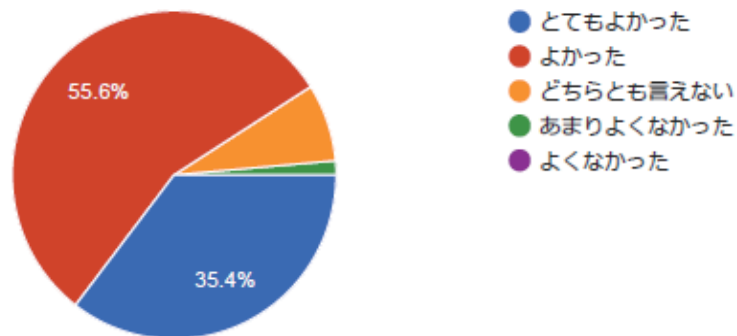
(4) 今後に生かせそうな情報やアイデアが得られましたか

144 件の回答



(5) 進行・スケジュールについてはいかがでしたか

144 件の回答



(6) 今回の研修についてご感想やご意見がありましたらご記入ください。

- ・ 対話の教育の神髄に迫っており、大変素晴らしいかったです。有り難うございました。
- ・ 講演内容が具体的で良かったです。
- ・ 具体的な事例や、参加者にも実際に体験する内容が組み込まれており、興味深く拝聴できました。
- ・ ワーキングメモリーの話から自身の学生への対応を考える機会となった。
- ・ 発達障害の学生さんへの対応について悩んだ時などに、専門的な相談や、スーパーバイザーを入れた協議体制が欲しい。
- ・ 発達障害は個性だと思っています。
が、自分と違う事でイライラすることがあります。
例として「なぜできないの?」「連絡しろよ」「把握して置いてよ」「意識が低い」などです。今日の話で理論的に改めて考えることができたように思います。
理論と感情をつなぐことは難しいですが、少しでも自分の日常に役立てたいと思います。
- ・ 講演の中で、「体験型」のような場面があり、このような場面をところどころに入れていただくと、分かり易く聞きやすく感じました。ありがとうございました。
- ・ 本学の専門性を生かした研修内容で、本学の特徴やよさを感じることができました。
- ・ 発達障害の理解と配慮について、具体的に学ぶ機会となった。互いに高め合う関係性へのチャレンジを日々継続していきたいと思っている。
- ・ 発達障害について、特性、支援のしかたについてよく理解できました。気になる学生がいて試行錯誤しています。できるところから取り組んでいきたいと思いました。障害の有無にかかわらず大事なものは「相手との対話」「お互い高め合う関係」だと改めて思いました。資格をとり病気の方のお世話をする仕事につく学生さんたちですので、今後もいろいろ相談できたり、教えていただくと助かります。
- ・ 大変貴重な研修に参加させていただき心より感謝申し上げます。
- ・ 本日はありがとうございました。
特別支援を要する学生が増える中、自分の中で少し理解が深まったように思います。今後の学生対応の中で活かしていきたいと思えます。ありがとうございました。
- ・ 特に「ワーキングメモリーの生涯発達」のグラフと先生のご説明は私にとって「腑に落ちた」ものでした。ありがとうございました。
- ・ 支援のあり方もお聞きしたかった。
- ・ ワーキングメモリーについてよく理解できました。有難うございました。
- ・ 想起させる工夫としての小テストはすぐに取り入れたい。障害があるなしに関わらず必要な工夫であると感じた。

- ・ とても解りやすくまとまった内容の講習会で、大変勉強になりました。今後は具体的な学生対応などについて、大学間で意見交換等出来ればと思います。ありがとうございました。
- ・ 発達障害学生支援について具体的な内容を聞くことができて良かったです。今後の対応に参考にしていきたいと思いました。
- ・ 大変勉強になり、これからの教育や生活に必要な情報だと思えます。ありがとうございました。
- ・ 発達障害についてワーキングメモリという考え方でとらえることで、どのような特性を持っているのか非常によくわかりました。スライドの資料も非常にうまくまとめられていてわかりやすかったです。今後の学生指導に役立てたいと思います。
- ・ 分かりやすい講義でした。
- ・ 学生の苦手への対応は全体の向上にもつながる、アクセシビリティ性の高いお話だと思いました。
- ・ 河村先生の分かりやすいお話で、自身の状況を重ねることができ、大変参考になりました。また、出張することなく参加できることに大変ありがたく思いました。ありがとうございました。
- ・ 研修会参加の機会をいただきありがとうございました。本学におきましても支援を必要とする学生は一定数おり、対応に試行錯誤、時間をかけて苦心しているところです。今回の貴重なご講演を視聴させていただき、学生対応のヒントをいただいたと存じます。今後に役だたさせていただきます。
- ・ 最後の質問にもあったように本大学への問題定義になった講演であったと思いました。
- ・ ワーキングメモリという研究テーマと実際の学生との対応が、とてもわかりやすく紐づけられていて腑に落ちることが多かったです。メモの重要性を改めて考えさせられました。
- ・ 具体的な支援方法がわかりました。
- ・ 今回の研修を通して学んだ配慮や支援に基づいた対応ができるように、学びをより一層深めたい。
- ・ 大変貴重なお話が伺えて、教育指導・支援の上でとても参考になりました。この理解を基に、具体的にどのような（どの水準までの）配慮を行うべきか、更に検討していきたいと考えています。ありがとうございました。
- ・ 身近なこととして、聞かせていただきました。ありがとうございました。
- ・ この度は研修会に参加させていただき、ありがとうございました。大変勉強になり、すぐにでも学生への接し方に活かしたいと思いました。
- ・ 次はこの度の研修内容を踏まえた事例研修など、日常の授業や業務の場面を想定した研修内容にしてはどうでしょうか。
- ・ 人それぞれに持っている個性を大事にしたいと改めて感じましたが、個性や特性の自覚や理解に学生教職員ともに差があるので、学生支援の難しさも同時に感じまし

た。学習者と教職員双方にとってソーシャルワーカーとも連携した大学生活支援が必要だところ数年とても感じていた思いが研修を通じてより強くなりました…。

- ・ 看護師という命を預かる職業に就く学生をどのように育てていくのか、ヒントを頂いたように感じた。しかし、個別で対応していくために、周りの影響はあると考えます。何を優先するのか難しい問題だと思いました。
- ・ PCを持参したがズームはスクリーンでの共有であり、資料だけで良かった。
- ・ 大変勉強になりました。早速先生の書籍を購入させていただきました。ありがとうございます。
- ・ 内容のボリュームの大きさからか、河村先生のお話が若干早口で理解しづらい点がありましたが、先生の教育研究の素晴らしさと熱意がひしひしと伝わりました。
- ・ 学生対応に活かしていきたい。
- ・ 学生の対応に関わってとても参考になりました
- ・ 発達障害について、わかりやすく説明していただき、ワーキングメモリの考え方などについて理解することができました。
- ・ 河村先生の講義内容が胸に刺さることや考えさせられることが多く、業務に活かせるだけでなく、今後の子育てや私生活にも生かせることが多くありました。
- ・ 今の学生に当てはまることが多く、納得しながら研修を聞くことができた。また、対応についても教えていただけて良かったが、もう少し対応について話が聞けるとよかった。ありがとうございます。
- ・ 発達障害の基礎でさえ知らないことが多いので、「わからない」を体験でき、大変有意義でした。授業の中で能力の高い学生につまらなく感じさせず、基準を下げることなくわかるように支援していくことは難しいと改めて感じました。
- ・ もう少し時間があったら良かった。最後が足早になったので
- ・ 積極的に学内の教職員の講師起用を希望します!!
- ・ これまで発達障害については、マスコミ等で少しは聞いていましたが、直接話を聞いたことがなかったのでよく理解することができました。学科の中にも該当する多くの学生がいるような気がします。また、私自身を振り返っても特徴がしっかりとあるように思えてきました。今後どう向かえばよいのか、資料を再読して考えたいと思います。
- ・ 障害のある学生またはグレーゾーンの学生に対し、教員は個人の見解だけでなく学生に対する理解を深めることが改めて必要だと感じました。この研修をうけ障害に対する理解がより深まったと感じます。ありがとうございます。
- ・ 良かったです
- ・ 事前情報提供および連携がうまく行っていないように見受けられた
- ・ ワーキングメモリーについて 言語系が主で 理系の数式 論理ではどうなのかなと思いました

- 具体例があり、発達障害の特徴についてはよくわかった。時間があれば、今後どのような対応をしていけばいいか、大学での可能な対応について、など、講師の先生の方法を聴いたり、ディスカッションするなどできればよかった。

また、施設面になるが、スクリーンに映し出された追加記載されていた内容のスライドの文字が見えにくかったので、カメラに映る範囲に座らなくてはいけないのか疑問であった。キャンパスごとに、資料の移り具合の確認をして、学生へ講義を始めてほしい。
- リモート学習ができて良かったと思います。
- 意見交換の時間がもう少しあるとよかった。
- 分かりやすい内容で、理解しやすかったです。障害を抱えている人は、周りに理解してもらうことが困難であったり、怠けていると思われたりすることも多いので、こういった研修を何度も行うことで、広く世間に理解してもらうことが必要だと感じました。
- 質疑の時間がもう少し欲しいです。学習障害者に対するかかわり方が聞きたかった。計算問題が出来ない学生にどのように関わると良いのでしょうか。
- 講演のみでなく、時折体験もあったため、楽しく受講することができました。ありがとうございました。
- 非常に興味深い内容だった。いろいろな視点があることを改めて知らされた。今の学生にも通用する部分があると思った。
- 改めて、学生の困り感を含めて基本的な内容を理解することができ、学生支援に当たって大変参考になりました。ありがとうございました。
- 話を聞いて自分に当てはまるどころもあり、とても勉強になりました。個人的に河村先生にお話しを聞いてみたいと思いました。
- ワーキングメモリについて、知らない事ばかりだったので、勉強になりました。
- 学部を超えて知らない事を知るチャンスがあるのは良い事だと思います。他にもいろんな分野での研修があると良いと思います。
- 個々の学生の状況は様々で、発達上の課題なのか生育上等の問題なのか判別が困難で、対応に苦慮することが多くあります。具体的な対応の方法を、もっと学びたいと思いました。
- 丁寧に説明して下さったので、分かりやすい講義でした。
- 過去の授業を振り返ってみて、支援が必要な学生であったかもしれないと思えるふしがあります。知ること・理解することの大切さを学びました。
- ワーキングメモリーという新しい知識を得ることができました。学習が困難な学生に対し、適応的アプローチをし、「できた」の体験を重ねることを理解しましたが、資格取得のラインについてはどう判断するのか課題があるとも感じました。不安症についての対応など具体的な方法を学びました。ありがとうございました。
- 着任1年目で本研修の講師を担当いただき、また、有意義な研修の機会を提供いただき、ありがとうございました。

- ・ 発達障害児・者との関わり方について関心があり、とても有意義な研修になりました。もっと具体的な事例をもって話が聞きたかったです。
- ・ 河村先生のご研究の内容を、分かりやすくかつ実践的に教えていただき大変勉強になりました。ありがとうございました。ご著書もぜひ拝読させていただきます。
- ・ 本学の学生への支援に直接的に役立てられる内容で、ありがたかった。
- ・ 大変勉強になりありがとうございました。
- ・ 学生対応に困る学生が増えている印象があるので、基本的な知識を知ることができ、大変参考になった。
- ・ 講師の方の声が聴き取りやすく、内容も分かり易く勉強になりました。
- ・ ①発達障害と学力の関係を研究し、本学入学の学生の状況を分析し、日々の支援に活かす情報が必要と感じています。最後の就職時期になっての対応は、現在の就職担当部署では無理がある。②個別指導の大切さや一人一人の学生のささやきを感じ取れる能力をどのように身に付けていくかということを再度、考えさせられました。③現在の「十把一絡げ」の授業形態からの脱皮を先生方が毎日の講義で実践していないと「絵にかいた餅」状態は続くと感じています。
- ・ 具体的な状況及びそれに対する実践的な対応策が示されており、大変勉強になった。
- ・ 録画があることで見直すことができとてもよかったです。録画をチャプターで区切ってもらえるとさらに利用しやすいと思いました。
- ・ 本学学生の具体的事例が出てくると、教職員の対応など日頃から生かせると感じた。
- ・ このような機会を頂き、今後活かしたいと思いました。
- ・ 障害と聞くと特別な対応が必要であると思いがちですが、個々の人間の特性を見極め、それぞれに適した対応をしていくという点では、皆同じであると感じました。
- ・ 日々の学習指導の中で、今回の研修の具体的な事を実践していきたい。
- ・ とても興味深く、拝聴させていただきました。ありがとうございました。個別対応の必要性を感じているものの、なかなか時間を確保できない現状にあるのが正直なところです。よって、多くの学生が学習困難を感じていると想定し、講義を工夫していくことが必要だと思っております。かなり時間を費やすため講義のコマ数が不足するのが、現在の悩みです。
- ・ 発達障害とはどういうものか、学生たちの反応に対してなぜそうなるのか、理解が進んだと思います。さっき言ったでしょ？ということが多々あり、ふざけているのか、と腹の立つこともありました。しかしそれに対して腹を立てるのではなく、どうしたら理解してもらえるかを考えていかないといけないんだとすっと腑に落ちました。
- ・ 私は子育て中でこの研修の内容については現在悩んでいることであった。子どもを無意味に怒ったりしていたので図にしてみたり、声掛けを改めようと思いました。

- ・ 動画で保存して後でオンデマンド視聴できることはありがたいです。準備された講師の先生、ありがとうございました。
- (7) 今後の研修会に向けてご意見やご要望がありましたらご記入ください。
- ・ 今後もFDはzoomで参加できるとありがたい。外部との打ち合わせや出張があっても、出先等で参加できる。
 - ・ 大学生の支援はじめ多種多様な学生の対応に日々精進してまいります。今後とも研修会参加どうぞよろしくお願い申し上げます。
 - ・ またこのような機会を得ることができたら幸いです。
 - ・ スクールソーシャルワーカー(SSW)に関する研修会の機会があれば参加したい。
 - ・ 配慮学生が増える中、今回の研修で考えることが多くあった。今後も本学の学生指導に役立つ研修会があると有意義。
 - ・ このような機会があれば、参加させていただきたいです。
 - ・ 高専の教員は教員免許などを持っていないものも多く、教育に関するスキルや今回の講演のような発達障害に関する教育支援に関する知識を得る機会は少ないので、オンライン聴講できて良かったです。今後もしできるだけ参加させていただきたいと考えています。引き続きよろしくお願いします。
 - ・ 今回このような合同研修会のご案内をいただきありがとうございました。
 - ・ 障害の対応については、色々な事例があると思いますので、今後も必要な研修ではないかと感じています。また、今後も各研修が出張することなく参加できることで、学生の対応可能時間が増え、大変ありがたいと思います。
 - ・ またこのような機会がありましたら参加させていただければと存じます。今後、本学のFD、SDにおきましても、貴学に参加していただける機会があればと考えております。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。
 - ・ 学生理解とともに本学園の学生への様々な合理的配慮等の実態等について研修したい。
 - ・ オンライン開催は事務局のご準備が大変と思いますが、講演を聞いたり資料閲覧がととも集中してできてました。ありがとうございました。
 - ・ 本日の続編を希望します。
 - ・ 第2回をお願いします。
 - ・ 簡易的な開催で事務局不可の低くなるような研修会を希望します
 - ・ 大学教育における合理的配慮と過重な負担の具体例について、日本国内ではあまり裁判自体が行われていないため、事例検討の材料に乏しいと聞いています。一方、米国では過重な負担について踏み込んだ判決が多く出されており、その多くが大学側に立った判決になっていると聞きます。障害学生とまではいえない学生層から、合理的配慮を逆手にとった単位不認定や教育内容の本質的変更を求めるような訴えが提訴されていることが背景にあるようです。大学全入時代、とくに定員充足が難しい時代の中で、誠実に学ぼうとする学生たちのために、大学がどのような工夫を

行って学びの場を守るかについて、「合理的配慮と過重な負担の具体例」といった内容で意見交換をしてみてはどうかと考えます。

- 先生方の専門性を研修に反映できることの意義は大きいと思います。
- 引き続き学生のことを少しでも多く理解できるような研修内容をお願いしたいです。最近では愛着形成や基本的信頼を獲得することの重要性を日々の経験から感じるが増えました…。ソーシャルスキルの支援や心の成長発達への支援について学びたいです。
- 今回の研修に関する内容をさらに深めるために、発達障害の方に対する大学の授業での実践事例などをご紹介いただけたらと思います。ご検討いただきますようよろしくお願いいたします。
- 試行錯誤しながら授業をしているので、実践してみようと思うことが多々ありました。今後さらに、多様な特性に合わせて学べる具体的方法（支援方法）の詳細を研修していただけると、専門的に学んでいない私でも、少しは学生の力になれるのではないかと思います。
- 現代の大学教育について、専門性や話題性のあるものを取り入れていただきたいです。ありがとうございました。
- 引き続き学習障害のある学生の支援の実際を事例を通して学びたい。
- 本人が障害を持っている自覚はないが、障害を持っている要素が強い学生への対応方法についての研修もお願いしたいです。
- スマホの影響と対策
- カリキュラム編成についての研修会を受講したいと思っております。ただ、全教職員に共通する内容かと言われると、△ですね…。
- 是非、毎年1回は障害学生支援についての研修を継続していただきたい。
- 学生の声に耳を傾けられるように、これからも定期的に特別支援教育関係の研修を聞きたいです。
- 大学生への関わりに役立つ教育論や幼児教育、音楽療法など多方面の分野の研修があると良いと思います。
- 今回の研修の第2弾を受けたいと思います。
- 発達障害に関しては、今後も定期的実施して欲しいと思います。
- 同じ学園内におられる先生方の専門分野の講演は大変良いと思います。同じ目線で見、感じるができるので理解しやすく有意義です。
- 教職課程での指導に活かせる研修の機会を増やしていただけると、大変ありがたいと思います。
- コロナ感染症対策に伴う心肺脳蘇生法について研修を開催してほしい
- このまま、学園の教職員を活用した研修を続けることが良いと思います。
- 年休取得奨励時期の研修は、いかななものかと思っている。
- ぜひオンデマンド視聴を継続していただきますようお願いいたします。

- 教育現場には、様々な学生達が学んでいます。理解に苦しむこともあります。意見を出し合い適切な研修ができるようなシステムの構築がほしい、大、小の研修会を望みます。
- デジタルトランスフォーメーションについてFD/SDしていただきたいです。

3. アクティブ・ラーニング及び C-Learning を用いた

授業紹介

インテリアデザインの授業展開

ーインテリアデザイン感覚を毎回の授業アンケートで確認していく方法ー

コミュニティ生活学科 古川 博仁

C-Learning によるコミュニケーションペーパー導入の試み

(スマートフォン、タブレット端末対応)

食物栄養学科 岡田 正浩

「模擬保育」を通してアクティブな学びを

ー主体的・能動的な学びで実践力を磨くー

保育学科 清見 嘉文

表現分野（図画工作・造形表現）遠隔授業の実践報告

学芸学部 子ども学科 小笠原 文

広島文化学園大学アクティブ・ラーニング実践報告

C-Learning を活用した「音楽科教育法 I」の授業実践

学芸学部 音楽学科 高橋 千絵

コロナ禍における母性看護学実習のアクティブ・ラーニング授業紹介

看護学部 看護学科 上林 聡子

「スポーツ生理学 I」における C-Learning を用いた遠隔授業紹介

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 森木 吾郎

インテリアデザインの授業展開

－インテリアデザイン感覚を毎回の授業アンケートで確認していく方法－

コミュニティ生活学科 古川 博仁

1. はじめに

令和3年度1年次後期に開講された「インテリアデザイン」の授業において、インターネットによりプロのインテリア作品（動画）に対する感想をC-Learning（アンケート）で行い、これを反転授業の形で教師も受講者の一員となって授業時間内でお互いに意見を出し合うことで、学生のインテリアデザイン感覚の変化を捉える試みを実施した。

授業の展開は毎回同じで、初めにインテリアの動画を10分間見せてその後すぐにC-Learningでアンケートを取り、その内容を学生に読んで聞かせ、動画で見せたプロのインテリア作品に対する学生の感覚（意見）を反転授業と捉え、教師が学生から学ぶ、あるいは学生同士が学び合う手法で展開した。

次の35分間は3D-CADソフトの機能を教師が教授し、残りの45分間でその機能を使って課題として与えた住居（間取り）を学生が如何にデザインしていくのか、その学生のデザインが毎回動画で紹介したプロのインテリア作品を教材とした反転授業とどのように連動していくのか、それを捉えるために授業の終わりに学生がデザインしたCGを画像の形で提出させた。

受講者は24人である。この授業は演習であり、欠点として、個々の学生がどの程度まで操作方法を理解しているのかを教師が毎回把握することが困難なことである。演習授業は、毎回の3D-CADソフトの操作方法の積み重ねであり、欠席等の事態が生じれば、当然学生は授業についてこれなくなる。パソコンを家庭で所持している学生は半数程度であり、さらに授業で使用している3D-CADソフトを家庭のパソコンにインストールしている学生は皆無である。この点が、学生の授業参加の意欲に大きく影響していることは否めない。

2. 授業の展開

2. 1 授業目的と内容

シラバスに掲載したように『この科目はコミュニティ生活学科のディプロマ・ポリシーのうち「生活に関する知識・技術を身につけている」と関連しており、インテリア・アドバイザーとしての基礎的知識を身につけ、インテリアのイメージをパース（透視図）でプレゼンテーションするテクニック、これを3D-CADソフトを利用して描くことで養う。』である。

実施した授業内容は次の通りである。

- 1回～3回 お絵かきソフトで色のトーンについて復習する。
- 4回～5回 3D-CADソフトで、これから取り組む課題の基となる間取り図を各自に作成させる。
- 6回～7回 3D-CADソフトで描いた間取り図を1消点パースに変換し、住居の外観内装を自分の好みのインテリアスタイルに色付けさせる。

8回～10回 3D-CADソフトで、リビング、ダイニングの内装、家具を配置させる。

11回～13回 3D-CADソフトで、各部屋のインテリアを仕上げさせる。

14回～15回 (オンライン授業)

2. 2 具体的な学生作品

授業内容を、学生が取り組んだ制作過程(作品)で示す。

(1) お絵かきソフトによる色のトーンの復習

(2) 課題の基となる間取り図



図1 1～3回 学生作品



図2 4～5回 学生作品

(3) 1消点パースに変換させる

(4) リビング、ダイニングを描かせる



図3 6～7回 学生作品



図4 8～10回 学生作品

(5) テーブルコーディネートを行う

(6) ライティングを行う

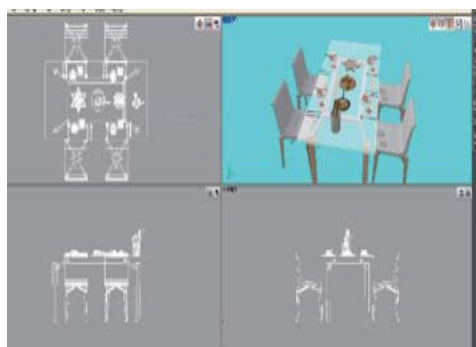


図5 テーブルコーディネート 学生作品



図6 ライティング 学生作品

(7) 各部屋を仕上げる



図7 11～13回 学生作品

一人の学生に焦点を当てて、その学生が提出したCG画像を授業内容に沿って掲載した。提出された画像を見て分かるように、学生のインテリアデザインへの取り組みが次第に意欲的になってきているように思われる。

次に、学生の意欲に関して、毎回授業初めに行ったC-Learningでのアンケートで示す。

2.3 アンケートを利用した反転授業

プロの動画作品（毎回異なる）を見た感想をC-Learningのアンケート機能で受講者に紹介し、学生が教師役になって内容を教え合う授業を展開した。ここでは、教師も受講者の一員と捉え、毎回10件程度のアンケートを教材としてお互いに意見を交わした。ここに7回～13回までのアンケート内容（一部抜粋）を掲載する。

私見であるが、回が重なる毎にアンケートの内容は充実してきており、これが先に示した学生の作品制作へ与える影響（意欲や完成度）に変化を与えているように思われる。

アンケートは、すべてプロの作品を鑑賞してから直後のものである（プロの作品は、毎回異なる）。

<7回目 アンケート>

- ・部屋の雰囲気が落ち着いていていいなと思いました。
- ・部屋が広々としていて趣味の場所もあるので楽しく過ごせそうと思いました。
- ・家のドアなどの内部建具を変えることでいき雰囲気が変わり、オリジナル感が出て良いなと思いました。

<8回目 アンケート>

- ・部屋の中全体が明るくなっていていいなと思いました。キッチンと机がくっついていて家事が楽そうだなと思いました。
- ・外観は和風に前の雰囲気を残しつつ変えられていて、内観では和風感があまりなくとても明るく落ち着いていて家族が暮らしやすそうな部屋になっていて、所々に和を取り入れている所などとても住みやすそうなんだなと思いました。
- ・和風な家をリノベーションして洋風と和風がうまく合ったすごく落ち着くような家になっていたし、部屋をあまり区切らずに開放的な空間になっていたので素敵だなと思いました。

<9回目 アンケート>

- ・庭が芝生で花もあっておしゃれだった。外観も内観も白がメインで統一されていて良いなと思

った。ドライルームがあることで雨の日でも関係なく洗濯物ができ邪魔にもならなくて家を建てる時私もドライルーム欲しいなと思いました。

- ・日当たりがよく、壁や家具が白で統一されていて明るい雰囲気があると思いました。庭は芝生で温かい雰囲気がありました。芝生なら子供がこけてもあまり痛くなさそうだし、手洗い場もあって子供が自由に遊べそうでいいなと思いました。
- ・子供のために考えた庭になっていて、部屋ではシンプルかつ清潔感ある部屋で壁の色や天井など白にまとめていてとても明るく空間が広く見えるのでとても住みやすそうだなと思いました。庭には所々に花などを飾っていて部屋にも観葉植物などを飾っていて様々なところに自然を取り入れていていいなと思いました。

<10回目 アンケート>

- ・小学生のころからユニバーサルデザインやバリアフリーは多く学んできていました。今はどんな人でも使いやすく過ごしやすいデザインかつおしゃれで、まちのいたるところがそのようなデザインになれば快適に安全に生活できると思いました。
- ・バリアフリーの家は家に段差がないことだけではなくて、あえて段差を作ることもバリアフリーなんだなと思いました。私の祖父母の家はリフォームしてバリアフリーの家になっていてトイレがすごく広いし段差も少ないので、私が将来リフォームするときに参考にしてみようと思います。

<11回目 アンケート>

- ・家庭災害を防止するために入浴するときは縦の手すりと横の手すりが必要だということがわかりました。また赤ちゃんは誤飲が多いので、周りにティッシュなど誤飲する可能性があるものは置かないよう気をつけなければならぬと思いました。
- ・お風呂は滑りやすいから手すりをつけるのはいいと思いました。また、浴槽に入るときに使う台もとてもいいと思いました。高齢者だけでなく、子供や若い人誰でも滑ることはあると思うのでお風呂場のバリアフリーはとてもいいと思いました。自分の家でも、お風呂場と脱衣所の温度差でヒートショックがおきないように、暖房器具を置いていたので続けていきたいです。いつか自分に子供ができたとき、今日見た対策を参考にしたいです。

<12回目 アンケート>

- ・部屋の中が落ち着いた雰囲気であたたかい感じがしました。リビングが広く感じて過ごしやすそうだなと思いました。外観が内装とは違って暗い色でまとまっていたので外観からは想像できない内装で驚きました。子供部屋には遊び心があって子供が楽しめる家だなと思いました。
- ・外観と内観で全然雰囲気が違って内観ではとてもナチュラルにまとめていてあまり仕切りを作らず部屋を広く見せていて様々な工夫があり、家族のことを考えた家になっていてとても過ごしやすそうだなと思いました。

<13回目 アンケート>

- ・すごく完成されていて統一してあるし、お皿もただ置くだけでなく角度を付けたりと、細かい点にも気を付けてあって、見えて不自然なところがないなと思いました。
- ・町並みや天候に合わせた家づくりになっていて、デザイン以外の面にも配慮されているところに、さすがプロだなと思いました。

アンケートから分かるように、学生の文字数は次第に増えており、作品に対する見方、単語も段々と専門的になってきている。

14回目からオンライン授業となった。ここでは、特色のある家を出題し、それを調べさせてみた。どのくらい専門的な回答が返って来たのかを、学生からの回答（一例）で示す。

<14回目 レポートの出題に対する学生からの回答の一例>

ここでは数問ある中から問1、問2に対する学生の回答を掲載する。

問1 MOOK HOUSE とはどのようなことか？

(学生からの回答)

Materials Of Original Kagoshima の略である。

鹿児島を中心とした地元の自然素材をふんだんに使った家のことであり、明るく自然な作りになっている。

問2 MOOK HOUSE に対してどのような感想を持ったか？

(学生からの回答)

緑と触れ合えるのはとてもいい環境だと思いました。あと、自然素材がふんだんに使っているので、部屋全体が暖かい感じがして過ごしやすそうだなと思いました。全体的に落ち着いた色の内装でゆっくりのんびり過ごせそうだなと思いました。

学生からの回答に住居に対してかなり専門的な単語が羅列していることが分かる。これは、アンケートの回答の変化からも伺われる。

15回目はオンラインで振り返り授業を行った。

振り返りで重要視したことは、3D-CAD ソフトはインテリアデザインの授業に適していたかどうか、インテリアデザインは将来自分にとってどのように活用できるかである。

<15回目 振り返り学習 学生からのコメント>

○3D-CAD ソフトに関して

- ・視覚的にわかりやすい。外装内装共に試作品が簡単に作成できることが主に優れているかなと感じた。
- ・建物や部屋を立体的に見れること。光の当たり方などを自分で決められること。自分の思うような設計を想像してよりリアルに仕上げるができること。家具の配置など細かい部分まで設計でき、色々な種類のテクスチャーがあり、自分だけのものを仕上げるができること。
- ・外壁だけではなく、家具や内装を立体的に見ながら考えることができる。実際の目線に立って内装を見ることができる
- ・家具など自分の好みにインテリアすることができ優れているなどと思いました。内観や外観で好みの色にすることができ、部屋1つ1つで雰囲気などを変えることができ自分の素敵な家を作ることができるので優れているなどと思いました。
- ・3D-CAD を使ってみて、360度回転して細かい作りが見れるところと、朝昼夜が変えられるから違った明るさや景色から見れるところが優れているなど感じました。

○インテリアデザインの授業を振り返って

- ・家具などの色を統一(類似のもの)にして、部屋全体まとまった雰囲気にするのが重要だと思いました。居心地がいいデザインにすること、利用する人にとって快適な空間をつくるのが重要だと思った。
- ・住みやすく、開放感があるかどうか、温かみがあるかどうか。さらに、物を置きすぎない、色の配色を綺麗にすること、自分が暮らしやすいと思うデザインにすること、統一感のあるデザインにすること、空間をうまく使うのが重要だと思いました。
- ・インテリアデザインで1番重要なことは住む人それぞれの希望に添っているかだと授業を通して思いました。1人の意見ではなく、家族だったら親の意見を聞いてキッチンはどうとか、子供のために庭は安全に遊びやすいようにこんな工夫をしようとかそういった話し合いの中で住む一人一人の希望を出しながらデザインしていくことがこれから気持ちよく生活するために大切なのかなと思いました。

3D-CAD ソフトに関しては、他のインテリア関係のソフトとあまり変わらない使い勝手のようである。最近ではフリーソフトでもかなり優れたものが出回っており、またスマホのアプリで言えば従前から優れたソフトが多く見受けられる。

インテリアデザインが将来の自分にとってどのように役立つのかについては、可成り踏み込んだコメントを見ることができる。

プロ感覚とは行かないまでも、デザインに相当なこだわりが感じられる。

3. まとめ

インテリアデザインの授業展開を、アンケートによる反転授業、それと学生の授業への取り組み、意欲、これを毎回提出させたCG画像で示すとともに、アンケートの内容、レポートへの回答、振り返り授業での学生からのコメントで示した。

今回の調査目的は、学生のインテリアデザイン(授業)への取り組みが、果たして今回取ったアクティブラーニングの手法で変化(効果)が見られたかどうかである。

授業はコンピュータを利用する手前、コンピュータを利用しているからこそ効果があったのではないかという見解もあるだろう。しかしながら、学生の授業参加への意欲は、アンケートの変化(文字数など)でも見られるように、徐々に高まっているように感じられる。教師が行う授業はパソコン操作方法に可成り重点が置かれており、それが学生にとって徐々に意欲が湧くことに繋がるようには思われない。むしろ、学生の意見や考え方が如何に授業に反映させられているのか、インテリアデザインの授業ではその取り組みが学生の授業参加への意欲を高めていたのではないかと推察する。

今回は行っていないが、今後の取り組みとして課題に対する問題解決をグループ・ワークで取り組ませ、さらにペア・ワークで操作方法を理解させることで、どこが困難だったのかを学生自身に把握させるような授業展開にチャレンジしたい。どの授業でもいえることだが、「課題に対する問題解決」、この力を如何に学生に身に付けさせていくのか、その授業展開が私の変わらぬテーマのままではあるが。

以上

C-Learningによるコミュニケーションペーパー導入の試み (スマートフォン、タブレット端末対応)

食物栄養学科 岡田正浩

1. はじめに

全国の大学・短期大学においてアクティブラーニング手法の導入が進み、本学においても開講授業の80%以上にアクティブラーニング手法が取り入れられている。講義科目にアクティブラーニング手法を取り入れることで授業が活発化することは知られているが、実験実習等は、元々ディスカッションや反転授業が多く取り組まれているため工夫に乏しいかもしれない。本取り組みは、2018年FD研修会をきっかけに解剖生理学実習や生化学実験で導入したリフレクション手法の1つ、コミュニケーションペーパーとその改善を報告する。

2. コミュニケーションペーパー

(1) 2018年～2020年

本実験・実習で用いたコミュニケーションペーパーは、三重大学、金沢星稜大学が使用した「大福帳」、豊田工業高等専門学校のコミュニケーション・カードを参考に作成し、1回目の「授業オリエンテーション」、15回目の「学修のまとめ」を除く13回分の授業について実施された。プリントされたコミュニケーションペーパーを配り授業終わりの10分間を利用して直接書き込んでもらう形式をとり、学生は授業の「日付」、「授業キーワード」、「授業の要点」、「自己点検評価（5段階）」の項目にそって記載していく。教員は記載されたペーパーに対して自筆でコメント書き込み返却した。1年間を通じたこの取り組みに対して学生のアンケートを取ったところ非常に評価が高く、学生個人の振り返りに役立ち、授業目的の達成や知識・理解を向上させる取り組みとして期待された。一方、毎回のペーパー記入にストレス、負担を感じる学生も見られた。アンケートとしてコミュニケーションペーパーのスマートフォン（スマホ）対応と紙の記入対応について回答（約40名）してもらったところ37%が「手書きが良い」、63%が「どちらでも良い」「スマホ対応が良い」「絶対スマホ対応が良い」となった。

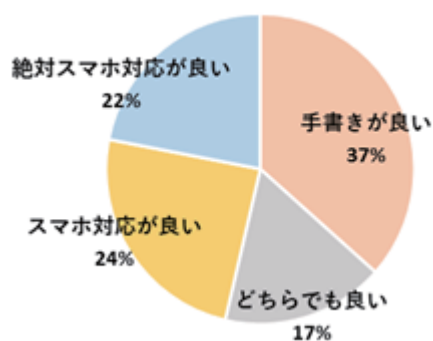


図1 スマホ対応コミュニケーションペーパーについて(参照:2022年紀要)

(2) 2021年の試み

全世界を巻き込む新型コロナウイルス感染症のパンデミックの中、本学も2020年からC-Learningを活用する学修支援が本格的に始まった。2020年はパンデミック1年目で本学も多くの新しい試みを余儀なくされ、全教職員がその対応追われていた。授業教材を新しく作成し準備を進めたが、コミュニケーションペーパーは対面授業のみ実施され授業の約70%の活用にとどまった。2021年は、パンデミック2年目としてコミュニケーションペーパーのC-Learningバージョンを作成し授業対応の準備を行った。学生40名に対して紙の対応とC-Learningを用いたス

スマートフォン対応と確実な比較をするため、前期の解剖生理学実習には、既存のペーパーで手書き対応。後期の生化学実験ではC-Learningを使用したスマホ対応で実施し比較・検討した。C-Learningの入力期限は、次の授業開始前までとした。

(3) 新しい項目の追加（質問力の向上）

2021年のコミュニケーションペーパーには新しい項目を追加した。本学食物栄養学科の学生は、授業態度に大きな問題はなく、質問した事項にもある程度の回答を得ることができる。しかし、授業内容や授業内のキーワード、技法についての質問に乏しい。実験の説明や知識の説明後に質問を求めてもほぼ質問が出ることはなく、学生、教員もその反応に慣れている可能性がある。スマホ対応のコミュニケーションペーパー導入を機に、学生の質問力を向上させるべく必須項目として質問の記載を課した。最初は学生も戸惑い「特になし」という記載が見られたが、教員コメントで一人ずつ対応することで履修学生全員が質問する体制が整った。

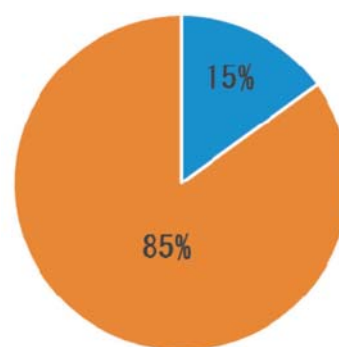


図2 スマホ対応コミュニケーションペーパーの入力の様子

3. プリント対応とスマホ対応

本食物栄養学科学生40名のアンケートでは、85%（34名）の学生がスマホ、タブレット入力を選び、15%（6名）がプリント記入方式を選ぶ結果となった。スマホ、タブレットを選んだ理由として、「直ぐに入力できるから。」「紙がもったいない。」「次の授業までに自分で空いた時間を見つけて場所を選ばず出来るから。」「スマホやタブレットの方が打ちやすい、文字を書くのがめんどろ。」など正直な意見が出た。プリント記入方式を選んだ学生の意見として、「スマホだと楽だけど、後からでいいやって思ってしまって入力し忘れたことが何回かあったので、紙で提出したほうが授業後出しやすいなって思いました。」「プリントがないため、家に帰って授業内容を忘れてしまうことがある。」「スマホだと後でいいやと記入を先延ばしにしてしまうから。」などの意見が出た。

いずれも学生が思っていることが出ており、現代のスマホの利便性の良い点と、またその弊害が現れている。



■プリント記入方式 ■スマホ、タブレット入力方式

図3 プリント記入、スマホ、タブレット入力方式の比較

4. まとめ

本授業では、リフレクション手法を用いて授業効果を向上させ、学生の教育に生かせることが実践によって分かってきた。これからも学生にあった質問や入力方式を実施、分析、検討、改善を継続して行っていく。以上、今年度のアクティブラーニング実践報告とする。

「模擬保育」を通してアクティブな学びを ー主体的・能動的な学びで実践力を磨くー

短期大学 保育学科 清見 嘉文

1. はじめに

「造形表現領域指導法Ⅱ（演習）」の授業は、2年生後期の幼稚園教諭二種免許取得のための必修科目である。したがって、これまでの3セメスターを通して身に付けてきた基礎的な知識・技能を総動員して、子どもたちの前に立つ保育者としての実践力を磨いていくことを目的としている。

そのための方法の1つとして、模擬保育を採り入れている。数回の実習を経験した学生たちは、子どもと共に過ごすことにも慣れ、実習園の先生方の厳しい眼差しを浴びながらの指導実習も経験している。自ら考えた保育指導計画を通しての指導実習経験は、直接感じた子どもたちの反応と、後に行われる先生方の批評や評価を得て、徐々に実践力へと定着していくことになる。しかしながら、その経験は、実習期間中の数回に過ぎない。そこで、指導実習経験を積み重ねるために、本授業での「模擬保育」という形で実施することとした。他者の前に立つというシチュエーションを最大限に生かし、それを学生主体の学びにつなげようとするものである。

2. 主体的・能動的な学びに向けた授業づくり

(1) 話し合いによる保育指導計画の作成

ねらいと活動への刺激を示す「造形表現アイデア」「題材例」の2つの資料及び解説を基に、学生一人一人が題材を考え保育指導案を作成する。その保育指導案を4人のグループメンバー内で発表し合い、意見交換を通して1つの案にまとめ上げた。

この段階では、①多様な活動を見て学ぶために特徴的な活動を取り上げること②子どもになったつもりで楽しめる活動であること③聞いただけでイメージが湧いてくるような題材名の工夫をすること④目標はできるだけ具体的な幼児の活動が浮かび上がるよう表すこと⑤準備へのイメージが持てるよう環境構成を具体的に示すこと、の条件をもとに話し合い練り上げていった。本学科では文章で表現することを苦手とする学生が多いが、自己のアイデアを基に少人数で話し合うことが、学生個々の思いを生かした計画につながるのではないかと考え実施した。

出来上がった保育指導案を見ながら、5つの条件を再度学生に問いかけた。特に、「題材名」「活動のねらい」についてはイメージ不足の内容が多く、再考を促した。グループ内で更に考え、はじき絵の活動を取り入れた「みんなの街に雪を降らせよう」や、魚釣りごっこに発展する「釣ってつって釣りまくれ！」などの工夫された題材が出来上がっていった。



計画作成に向けて話し合い

(2) イメージの交流を基にしたの準備

保育指導計画を基に、各グループのメンバーで協力して準備を整えていった。

- ・ 幼児が使用する材料・用具
(数・量・大きさ等をねらいに照らして考える)
 - ・ 提示用資料
 - ・ 導入の方法と必要な物品
 - ・ ティームティーチングの際の役割分担 (T1、T2、T3、T4の決定) 等
- 準備した物は、いつでも取り出せるよう棚に保管しておいた。

(3) 模擬保育実施時における3つの役割の経験

- ① 指導者：各グループの4名
- ② 子供役：12名
- ③ 参観者：残る学生約20名余り

以上の役割を、各グループの発表ごとに交代し、①②③の3者を全員が経験していった。そうすることによって、それまで指導者としての視点のみで計画していた活動に、多様な視点が加わり、より幅広い指導の工夫や援助の在り方を学ぶことができるのではないかと考えて進めた。

(4) 主体的な振り返りのための条件設定

ただ何気なく子ども役として楽しんだり保育の様子を見ていたりしたのでは、学生個々の実践力にはつながりにくい。何よりも、意見は自ら持とうとしなければ自然に生まれてくるものではない。

そこで、発表後には振り返りの時間をもち、全員が①②③の3者の立場から、気付きや感想を発表した。その発表内容は、どのような簡単なものでもよいが、決して他者と同じ内容にならないようにする、発言を聞いて指導者役の学生が改善等に向かう意欲が持てるよう配慮する、という条件を付けた。

(5) 映像による保存

各グループの模擬保育の様子は、ビデオカメラで撮影し保存していった。

振り返りが不十分な場合や参考にしてほしい場面等がある場合には、映写会を開き、思いを新たにす材料とする。C-Learningの教材倉庫に保管し、取り出し視聴することも有効である。

3. 実践を通しての振り返り

(1) 計画・準備段階



皆の見守りの中で先生役として

指導案の作成は、やはり苦手とする学生が多い。保育経験が乏しく他者任せの意識がぬぐえないためか、イメージを働かせようとしないうかがえたが、あえて放置した。そのため、計画の不十分さや材料・用具の準備不足に戸惑う姿、打ち合わせ不足のために自グループの発表の直前になって慌てる様子も見られた。

しかし、グループによっては空き時間を利用して準備に向かう姿も見られ始めた。それを、授業で紹介すると、示し合わせて準備に向かうグループが増えてきた。

(2) 模擬保育実施段階

指導者としての実践力は、当然のことながら未熟である。しかし、T1 或いは活動手順の説明役になった学生の子ども役に向けた声掛けは、表情豊かで生き生きと語り掛ける場面が多く見られた。やはり、実習の場での実際の子どもたちの前での指導経験は、子どもに向かう意識を大きく向上させているように思われる。また、そのような仲間の姿は、他の学生にも自ずと広がっていった。

模擬保育終了後の振り返りでは、他者と重ならないという条件を守り、多様な気付きが発表された。学生は実によく見ており、細やかな眼差しをもって捉えた発言に、皆が納得する様子が窺えた。その一言一言は貴重な学びとして、各人に染み入っていったように思える。疑問点や望ましくない方向性については、その都度指導者が解説し修正していった。さらに、望ましい方向性を特に強調してほめ、必要な内容が自ずと定着するよう配慮した。

(3) 映像を通しての振り返りは、時間不足をカバーするとともに、望ましい方向性の強調に有効であった。

4 C-Learning を使った学びの整理

全員が模擬保育を終えてまとめをする段階において、オンラインの授業へと移行した。そこで、以下の5つの観点から資料を提供し、課題をレポートで提出する活動を取り入れた。

- ① 題材を選ぶときのポイント
- ② 事前（活動を始める前）に気を付けることは？
- ③ 活動を始める（導入）時の工夫は？
- ④ 活動中に指導者として配慮することは？
- ⑤ 活動が終わった後はどうする？

以上の課題は、模擬保育の振り返り時に重点的に押さえた観点である。どのようなささやかな解答も概ね正解であり、気付きの内容よりも数に評価の重きを置くことを伝えたことで、多くの意見がレポートとして提出された。

さらに、その回答を項目ごとに集約し、それを教材として繰り返し提示することで、学びへの意欲はさらに向上していったように思える。

5 まとめ

2年生の後期、後わずかで保育現場で働き始める多くの学生たちにどのように力を付けて送り出していくことができるかが、毎年の課題である。すべての実習を終え、後は卒業を待つだけという意識の学生たちに、子どもたちの前に立つことのできる勇気と知恵・技の力を造形の方面から育てたいという願いから、毎年改善を続けながら進めてきた実践でもある。

経験が乏しく、活動のイメージも十分に持つことのできない学生に、いきなり高い目標を提示しても、主体的な学びは期待できない。まずは、今立っている場所から歩み出すことが重要である。そのため、批評的な発言は極力控え、“よさ”を見つけて“ほめる”ことを中心に進めてきた。回数を重ねるに連れ、学生たちは仲間の姿に影響を受けながら着実に成長してきたように思える。あるグループの保育の振り返り時に、「T1の○○さんの声の表情が素晴らしい。プロの保育士にも匹敵する」とほめた。その時の輝くような笑顔は忘れられない。更に、次の発表のグループの声も明らかに変わったように思う。やはり、学生の中での育ちを大切にしなければならないことを確認することができた。

日頃、学習に積極的に向かうことのできない学生、造形への苦手意識が大きく心を開けない学生、人の前に立つことをためらう学生など、マイナス的要素をもつ学生も、保育の中では活躍できる場面がある。そこを見逃さず捉え評価することが、主体的・能動的な学びにつながるのではないかと考えている。

学生の感想から

子ども目線、同僚の保育者目線、保育者になることを体験し、学べたことはすごく力になったと思います。保育者をしてみて準備がどれだけ大切で大変か経験し、導入の仕方、子どもとの関わり方など改めて難しさを感じました。でも「次からはこうしなきゃいけない」ということが明確にできたので、すごくいい授業になりました。安全面にも気を配り、子どもも先生も楽しめる、就職先ではそんな環境づくりを心がけていきたいと思いました。

模擬授業では、どんなことに配慮したらいいのか、活動に対して、いろんな人の意見を聞く機会をもらえるなど、学びをすごく深められたと思った。

友達と協力して実際に製作を提案し、指導者となって実践するということはとても大変なことだったけれど、周りの子ども役の人が楽しんでくれたり先生が適切なアドバイスをくださったお陰で、改善点はあるものとても楽しく模擬保育が行えたと思います。現場では、もっと子どもたちと楽しんで制作活動をしたいと思います。

実際に子どもになったり保育者になったり観察者になったりすることで、自分が今まで知らなかったことや、違う視点からの意見を聞くことができたので、とてもよい機会になりました。みんなの前でやってみて楽しいと言ってもらえたのでとても達成感があり、改善点も教えてもらったのでいい勉強になりました。

表現分野（図画工作・造形表現）遠隔授業の実践報告

学芸学部 子ども学科 小笠原 文

1. はじめに

2019年12月31日、中国湖北省武漢市から原因不明の肺炎の集団感染事例として世界保健機構に報告された新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の急速かつ国際的な拡大は現代を生きる我々の生活に甚大な影響を与えた。当初は短期間での収束を示唆する楽観論も散見され、応急的・一時的な対応がさまざまな場面で採用された。教育におけるオンライン授業もそのように捉えられがちであるが、本来は、オンラインも含めたICTを活用した授業は応急的・一時的なものではないはずである。小・中・高等学校教育に関して言えば、2019年12月19日に文部科学大臣を本部長とする「GIGAスクール実現推進本部」が設置されている。大学教育においても、2012年にはじめて文部科学省の施策用語として登場した「アクティブ・ラーニング」¹というキーワードのもと、ICTを用いた双方向性ツールとして推奨・推進されてきた。本学においてもアクティブ・ラーニング推進委員会が2015年から発足し、オンライン授業のプラットフォームとなる「C-Learning」の研修会はコロナ禍以前に行われていた。しかし、実際にC-Learningを部分的（小テスト機能やレポート機能など）のみにでも授業で利用する教員はごく一部に限られていた。特に演習系・実技系の授業はオンラインではできないものと考えられ、C-Learningを使った授業方法を模索する動きはなかったと言える。しかし、2020年度、2021年度を通し、当初は応急的・一時的な要素も含みつつ開始せざるを得なかったオンライン授業は再考・改善が求められ、それは演習系・実技系の授業においても例外ではない。本報告は、表現分野の演習系・実技系で実施したオンライン授業を取り上げ、検証を試みるものである。

2. 造形表現

本学科における「造形表現」は保育士資格取得のために必修の2年次専門科目（前期開講）である。後期の「表現領域指導法Ⅱ」（幼稚園教諭免許取得のための選択必修科目）とセットで履修することが推奨され、学年の7割程度の学生が履修する。授業内容は①幼稚園や保育園で子どもが行う造形表現活動②幼稚園や保育園で指導者が作成する制作物③家庭と幼児・保育施設をつなぐ造形活動という「子ども」「指導者」「家庭」をベースにした造形実技である。特に「指導者」の造形活動ではグループでの壁面制作などを行ってきたが、オンライン授業ではグループの活動も大型の作品政策も実質不可能であった。2020年度と2021年度の造形表現授業の一部はC-Learningを用いた遠隔授業を行うことになったが、以下のように進めた。

- | |
|---|
| 1) C-Learningのアンケート機能を用いて学生に教材発送先の住所・氏名を入力してもらい、宛名シールを作成、レターパックライトを用いて教材セットを学生の自宅に発送する。 |
| 2) 出席と資料のセッティング。授業開始時刻に学生は出席ボタンと教材にアクセスする。教 |

¹ 中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)』2012年8月28日

材は「課題説明（課題の進め方マニュアル）」と「課題についての資料（課題の意義など）」の2点を用意し、毎回プリントをしてクリアファイルに整理することを指示した。

3) 作品を作成し、写真を撮ってレポート機能に提出する。振り返りコメントも入力する。



図1 造形表現 : 課題についての資料（課題の意義など）

3. 図画工作

本学科における「図画工作」は小学校教諭1種免許取得のための必修科目で、1年生後期に開講される。小学校免許を取得しなくても美術・図工が好きな学生は履修するため、履修者の割合は学年の4割程度である。本来であればお互いの作品や制作過程を見たり、意見や感想を言い合ったりするなど交流をしながら表現を深めていく授業であるが、遠隔授業では各自が家庭で制作するためそのような交流部分が不足するという危惧があった。本授業では受講者全員にスケッチブックを配布し、アイディアスケッチに用いる他に「今週の一枚」という課題を課している。近年、スマートフォンのカメラ機能の向上に伴い、多くの人が気軽に頻繁に写真を撮るようになった。一方で、撮り溜めた写真をプリントして見直す機会は多くはない。「今週の一枚」は日常生活の中で美しい・楽しいと感じる瞬間を撮影し、プリントしたものをスケッチブックに毎週貼りコメントをつけていくという活動である。日常から美的なものや自らの心の動きを感じ、切り出す訓練と位置付けている。

今回の遠隔授業期間中は発送した教材の作成に加えて、「今週の一枚」を協働版に投稿し、お互いにコメントを書き込む活動を行なった。対面授業において「今週の一枚」は各自がスケッチブックに貼っていく日記的なもので、クラスでの共有はないが、協働版機能を使うことで共有が可能となり、そのことについて好意的な意見もあがった。

4. 新規採用教員研修「表現遊び」

学内での授業ではないが、広島県教育委員会・乳幼児教育支援センターが主催する2021年6月に令和3年度幼稚園新規採用教員研修園外研修の講師として「表現遊び」を担当した。講義と実技合わせて100分の授業を主催者（教育委員会）、講師（広島文化学園大学長東キャンパス）、受講者（各所属園）をZOOMで繋いで行なった。

1) 乳幼児にとって「造形活動」とはどのような意味があるのか (7分) PPTを用いた講義
2) 子どもの年齢・発達に合った活動例 (8分) PPTを用いた講義
3) お役立ちポケット 作ってみましょう! (60分) ZOOMブレイクアウトルームを用いた実技 ・手形アート ・はじめての「ハサミ・のり」 アイデアの共有
4) まとめ・質疑応答 (15分)

実技部分は使用する用具や画材をあらかじめ受講者に伝え用意をしてもらい、各自所属する園からZOOMに接続してもらった。受講者28名を3人×4グループ、2人×8グループの12グループに分け、季節の制作の1月から12月を担当し、アイデアを共有することによって、今後の造形活動実践の中で役に立てることができることをねらいとした。

5. まとめ

2020年度、2021年度の2年間は、対面授業と遠隔授業を行き来し、その日程も事前把握が難しかったため、授業計画及び実施は困難を極めた。基本的には数回分の課題を設定し、その材料をセットにして受講者の自宅に郵送で届け、時間割に示された日時に課題を行わせC-Learningに提出させるという方法をとった。中には幼い頃に受講していた「Benesse こどもチャレンジ」のような郵送型の教材を思い出し、楽しく意欲的に取り組むことができた学生もいたようである。また、自分のペースで作品を制作したい学生からも好評であった。さらには、協働版を利用することで、対面授業では全員分をじっくり見ることがないクラスメートの作品を知ることができたという利点があった。ZOOMを用いてのアイデア共有や質疑応答も対面以上に活発であった。対面における他者との心的距離をZOOMやC-Learningはある程度均一化させ、そこから普段は生じない交流が発生したように思えた。

一方で、問題点としては、材料が郵送できるものかつ90分で完成できるものに限られ、小さくてまとまりの良い課題設定しかできなかったこと、感触遊びやグループワークができなかったことがあげられた。また、メールやC-Learningを利用した文字だけの指示を苦手とする学生は一定数存在し、ごく少数ではあるが離脱者を出すことに繋がった。お互いの言葉や反応がリアルタイムで確認できるZOOMやMEETを併用することが理想的であることが確認された。小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説図画工作編の第4章指導計画の作成と内容の取り扱い2内容の取り扱いと指導上の配慮事項の(10) コンピュータ、カメラなどの情報機器の利用では、図画工作科における情報機器の扱いや、それらを授業のねらいと照らし合わせて必要性を十分に検討して利用することについて示している。情報機器は様々な活動に活用できる機器であるとした上で、「実際にものに触れたり見たりすることが図画工作科の資質・能力の育成において重要である」と記されていることも踏まえ、今後も表現分野の授業開発と実践を行なっていきたい。

広島文化学園大学アクティブ・ラーニング実践報告

C-Learning を活用した「音楽科教育法 I」の授業実践

学芸学部 音楽学科 高橋千絵

1. はじめに

「音楽科教育法 I」は、3年次前期に開講されている教職必修科目である。学習指導要領や実際に使われている中学校、高等学校の音楽の教科書を用いて、学校における音楽教育の位置付け・目的・内容・方法等について、現代社会の課題を踏まえた音楽科教育の在り方について教育観・指導観を持てるようになることを目標としている。また音楽授業の組み立て、指導案作成のための基礎的知見を得るとともに基本的視点を養う科目である。

これまでの課題として、①学生の自学習時間が少ないこと、②コロナ禍により、歌唱やリコーダーなどの実践活動やペア学習、グループワークがおこなえず、説明や解説が長くなり学生の主体的な学びを促すことが難しいこと、などが挙げられる。これらの問題点を解消するために、C-Learning を活用した授業実践を実施した。

2. 授業の流れ

(1) 前時の振り返り

C-Learning の「小テスト」機能を利用し、15 問から 20 問の問題を解答させ、その後学生の解答結果をプロジェクターでスクリーンに映しながら (図 1)、間違いやすいポイントや解説をおこない、前時の振り返りを実施した。小テスト機能を使った振り返りは 16 回中 13 回分の授業で実施した。解説を含めて 25 分以内で収まるようにしている。

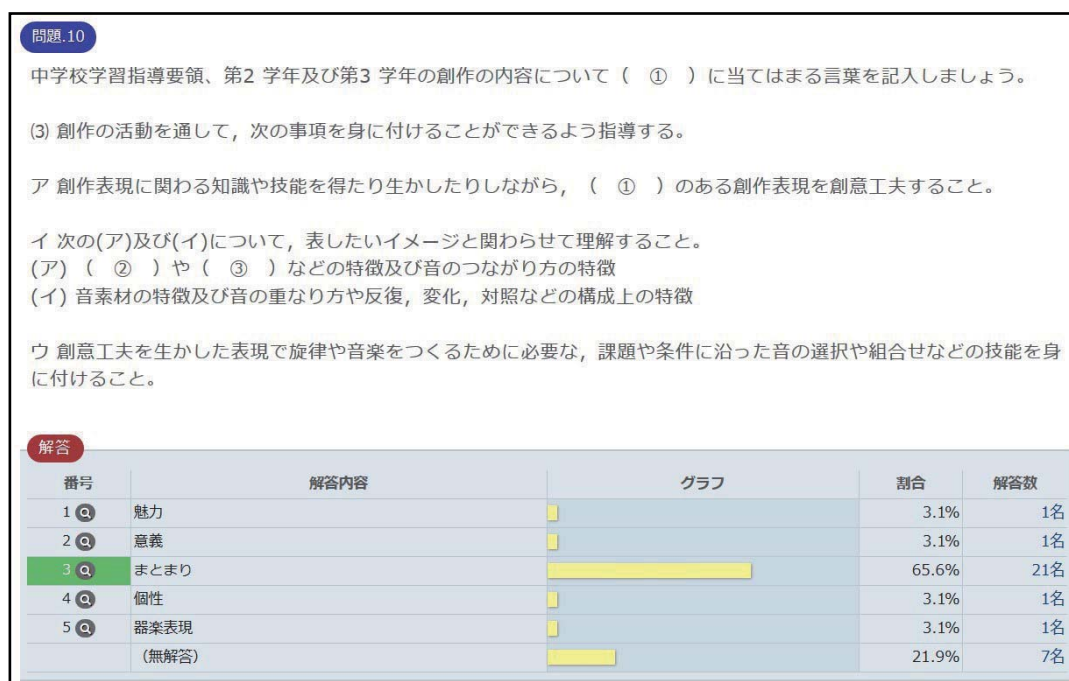


図 1 音楽科教育法 I 第 11 回 C-Learning 「小テスト」結果より

また、前時のまとめとして学生が書いたレポートを匿名にしたものを「教材倉庫」に保管し、「小テスト」が早く終わった学生には、目を通すように促した。

7/14課題

提出テキスト
鑑賞の授業も単に見せて聴かせて感想を書かせるだけではなく、きちんと奏法や見どころなど説明してあげないといけないということがわかりました。そのためには、自分自身もその曲をしっかりと理解している必要があると感じました。
今回の授業では、共通事項と教材研究について勉強しました。その中でも印象に残ったことは共通事項についてです。音楽の授業を行う(考える)上で、音楽活動が主体になりがちですが、活動だけではなく学習の面とバランス良く相互関連させることで、学習としての授業になり、より深い学びになることがわかりました。
鑑賞指導って、比較的簡単なイメージがあったけど、全然そんなことないんだなと思いました。感性を磨くというのは難しいなと思いました。
ただ鑑賞するだけではなく、どんなことを生徒に感じて欲しいか、その内容を学ぶ意味など、様々な観点から鑑賞の授業を行うべきだと思いました。またどんな内容の時も、常に共通事項を意識しておくべきだと思いました。
今回の講義を受けて、共通事項についてわかりました。共通事項は単独に学習されるのではなく共通事項と音楽活動を結びつけて一連のものとして学習することで、活動に偏りすぎない学習としての授業を意識することが重要であることがわかりました。

図2 第12回のレポート課題 学生提出レポートの一部抜粋

さらに、良い意見などは抽出し、PowerPointで紹介し、学生の意見をできるだけ共有できるように工夫した。

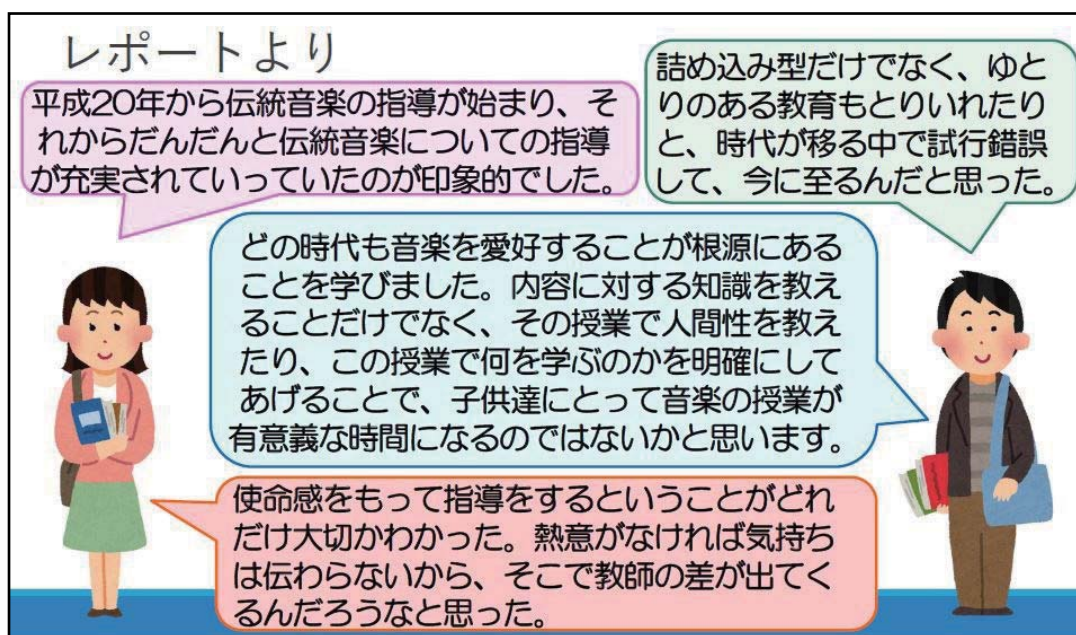


図3 第2回講義 スライド9枚目

(2) 本時の内容

前時の振り返りの後、本時の内容に入る。講義はPowerPointと配布プリントを使用し、最初に必ず目標を提示することで、授業終了時の到達目標を明確にしている。本時の内容は60分以内に収め、残りの5分をまとめの時間とした。

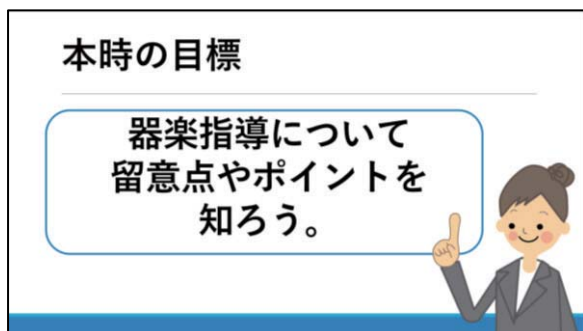


図4 第8回講義 スライド2枚目



図5 第11回講義 スライド3枚目

また、本来であれば授業毎にペア学習やグループワークを取り入れるなど、意見交換の場を多く設けているが、コロナ禍によりプリントに記入した自身の意見を、他の学生と見せ合う形で意見を交換させた。学生たちの意見は机間指導で確認し、板書するなどして全学生に共有させることを心掛けた。

授業における鑑賞活動の意義について

☆自分の考えを記入しよう

☆他の意見を聞いて記入しよう

図6 第11回講義 配布プリントより 一部抜粋

(3) 授業のまとめ

授業の終わり5分で、C-Learningの「レポート」機能を使用し、①今日の講義内容の中で、一番印象に残った内容は何ですか。理由も含めて記入してください。②今日の授業の中で、分からなかったことや質問があれば記入してください。という課題を授業毎に課している。

このレポート結果は、前述の通り、翌週の授業の開始時に公開し、質問がある場合などは、解説とともに答える形をとっている。

(4) 資料の保管

講義で使用した、PowerPoint、配布プリントについては、授業後にPDFに変換したデータをC-Learningの「教材倉庫」に保管し、学生が自由に振り返り学修ができるようにした。

3. 評価と課題

授業開始時の「小テスト」の実施は、今年度初めての試みだったため、学生の様子を見るために、結果は評価には加えないことを伝え、資料を見ずにチャレンジしても、資料を見ながら復習をしても、どちらでも良いことにして実施した。学生の様子を窺ってみると、回によっても異なるが、自身の記憶を頼りにチャレンジしている学生と、資料を見ながら復習している学生は、概ね半数くらいずつだったと思われる。最初に資料を見ずにチャレンジし、残り時間で資料を見て確認している学生も数名いた。

これまで、学生評価アンケートの結果から、学生の自学習の時間が少ないことが課題となっていたが、この度のアンケートでは、1週間の自学習の時間が3時間以内1名、2時間以内1名と、これまでになくしっかりと予習・復習をしている学生がいることが分かった。また、1時間未満ではあるが8名の学生が予習・復習をしていることが窺えた。残りの9名は30分未満という結果になったが、これまでよりも予習・復習の時間が全体的に増えていることが明らかとなった。「音楽科教育法Ⅰ」は学習指導要領の中身について学ぶ科目であり、新規に覚えることも多い科目である。学生の自学習の時間増加を促すために、授業毎の「小テスト」が効果的だったと推察する。次年度は、「小テスト」の結果を評価に加えることを検討し、さらなる自学習の増加を目標とした。

最後に、授業評価アンケートの自由記述を一部紹介したい。「パワーポイントを用いたり、復習の小テストがあつたりして、理解しやすく、新しい知識を得ることが出来ました。」「覚えることが沢山ありとても難しかったです。」「音楽教育についてさまざまな知識を身につけることができた」「授業の振り返りや、小テストなど、当日やることが毎時はっきりしていて分かりやすくとてもスムーズな授業でした。ありがとうございました。」「とてもわかりやすい授業でした。学習指導要領をしっかりと書けるようになりたいです。後期もよろしくお願い致します。」「授業の始めに、前回の復習小テストがあり、勉強になりました。ありがとうございました。」

コロナ禍における母性看護学実習のアクティブ・ラーニング授業紹介

看護学部 看護学科 上林聡子

1. 母性看護学実習の学内実習・オンライン実習場面

母性看護学実習は看護学部教育課程の中で3年次後期から4年次前期に配置されている実習科目で、本来であれば産科病棟（施設）において臨地実習を行う科目である。しかし、昨年からのコロナ禍の影響で、感染予防対策の一環として臨地実習施設の自粛状況が継続している。

そこで、学内における限られた学修環境下で学生の学びを如何に、臨地実習感を醸し出ししながら、かつ臨地実習では体得でき難い知識と技術を経験知として習得することが可能になるかの幾つかの新たな取り組みを導入した。

学内実習では教員が褥婦役・看護師役となり、在宅看護実習室を使用し、妊婦体験や新生児との生活を考える時間も取り入れた。受け持ち褥婦の病室でのバイタルサイン測定や全身状態の観察実施から、受け持ち褥婦と新生児に必要な看護を考え実践していく展開と、周産期にある対象者の妊娠中や退院後の生活をイメージし看護を深めていくための実習展開とした。また、学内実習期間の中で呉市すこやか子育て支援センター（くれくれ*ば・ひろひろ*ば）、又はひなた助産所でのオンライン実習も半日組み込んだ。教員1名が施設に伺い、学内にいる学生と実習施設をオンラインでつなぎ、講師からの実際の保健指導に関する内容の講義や、子育て支援センターの様子や利用者との交流を図った。



褥婦（教員）に声をかける担当学生と
場面見学学生



退院後の新生児の生活環境を在宅実習室で
考える学生たち

オンライン実習の展開は、学内にいる教員と自宅にいる学生を Microsoft Teams を使用し、母性看護学の対象者に必要な看護を考えていけるよう支援した。受け持ち褥婦と関わる場面では学生は学内にいる教員に自身の行動を口頭で指示し、指示を受けた教員はモデル人形を対象に看護を提供していった。

オンライン実習の受け持ち褥婦の事例は教員が作成、実習グループ毎の学生のレディネス状況に応じて、様々な工夫や内容変更をしながら実習を展開していった。



分娩進行を判断する内診について
助産師資格を持っている教員からの指導場面



受け持ち学生の指示を受けながら
バイタルサイン測定の実施



授乳見学場面

Geib① PP	Geib② PP	Geib③ PP	Geib④ PP
Bp116/72 P 80 BT36.8 Hr70B/A, KOT- 72221	Bp116/72 P 80 BT36.8 Hr70B/A, KOT- 72221	Bp110/68 P 76, BT37.0 36.5A7 Hr60B/A, KOT- M66T3XN	Bp114/74 P 78, BT36.8 36.4 A7 Hr60A Hr 70B/A, KOT10
N/1 右腰 P 刺 右赤色 L1/4 ツツツツツ 倉1A P 刺判内	N/2 右腰 P 刺 右赤色 L1/4 ツツツツツ	M/2 右腰 P 刺 右赤色 L1/4 ツツツツツ 倉1P 刺判内前01刺判	M/3 右腰 P 刺 右赤色 L1/4 ツツツツツ 倉1M 1/4 赤色
乳管右5, 左3 夕方~11個, odema+ 体層小生小311 1~2h 2°C α 右腰 本黄だま, ツツツツツ	乳管右5, 左3 夕方~11個, odema+ 体層小生小311 1~2h 2°C α 右腰 本黄だま, ツツツツツ	乳管111個 両乳頭乳輪 edema+体層小生小311 右7本, 左5本 移分4分 身取込 1~3h 2°C ツツツツツ, 前2本ツツ ツツツツツ BillAにツツツツ	乳管111個 両乳頭乳輪 edema+体層小生小311 左5, 右7 身取込4分 α 1~3h 2°C, 両乳不足 ツツツツツ ツツツツツ ツツツツツ 本黄だま 胸の抱き

教員作成の受け持ち褥婦に関する基礎情報

2. 新しい母性看護学実習の取組みと考察

学生が臨地で経験し得る実習場面を教員間で検討、限りなく実際的な場면을想定・展開した。

実習グループは学内実習であっても、オンライン実習であっても学生 5～6 名で編成されており、その内 1 名の学生が褥婦受け持ち学生となり、残りの実習グループ学生は見学者として受け持ち褥婦の看護展開の情報収集を担当した。学内実習の場合は褥婦受け持ち学生が主となりモデル人形または褥婦役教員に対して援助を実施するが、オンライン実習の場合は、教員が「学生兼褥婦役」「カメラ担当兼指導者役」を分担し、褥婦の産後の進行性変化の観察と新生児の観察場面各モデル人形を使用し、学生に映像として見せながら実習展開を行った。受け持ち学生は受け持ち褥婦との関わり場面で必要な看護援助技術の一つひとつを、オンライン上で学生役教員に指示、その指示に基づき、学生役教員は言葉どおりの看護援助をモデル人形に提供した。幾つかの看護援助場面を提供・録画後、実習グループ学生間で振り返り、意見交換、看護援助内容の検証を行った。その後、教員との合同カンファレンスで、振り返り学習のまとめ、今後の課題を抽出、学修内容の確認作業を行った。

今回、コロナ禍での母性看護学実習の新たな取組みのメリットとして、学内実習・オンライン実習共に臨地実習では時間的・物理的配慮から実習不可能な場面の展開を可能とし、学生自身の事前準備不足が及ぼす影響・事態を学生自身が身を持って体験可能とした。また同じ実習グループの見学の学生も実施者目線（観察者としての距離感を持つことで）、受け持ち学生の看護展開を客観的に判断（看護援助行動の根拠の理解等）することができた。

一方、デメリットとしては、受け持ち学生が学生役教員にオンライン上での指示を出す事の難しさ（学生自身の語彙力、コミュニケーション手法等の不足）や、臨床現場での緊張感・空気の流れを伝える事の限界、安易なやり直し可能感（現場では時間は戻せない）等があがっている。

学生はオンライン実習を経験することで、看護場面における自分自身の動きを適切に言語化し、教員に伝える事の難しさを実感しており、正確に言語化できないことは、知識と技術が自分自身に定着していない事によることを今回のオンライン実習で身に染みて学習できていた。また、時間的な余裕は学生の学習不足の部分を集散的に焦点化して支援する事を容易にしているため、今後もコロナ禍での看護学実習展開について、臨床施設にも協力を求めながら柔軟に対応していきたい。

なお、この内容は第 62 回日本母性衛生学会に発表した内容も一部含む。

「スポーツ生理学Ⅰ」におけるC-Learningを用いた遠隔授業紹介

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 森木 吾郎

1. はじめに

「スポーツ生理学Ⅰ」は、1年次後期に開講される専門教育科目である。内容は、ヒトの身体機能の働きおよびそれらが運動・スポーツによってどのように変化するかについて講義する科目である。本科目の大きな特徴として以下の2点が挙げられる。一点目は、卒業要件上（コース必修）および多くの資格取得上（中・高教員免許（保健体育）、健康運動指導士、健康運動実践指導者、JATI トレーニング指導者）において『必修科目として配置される科目』であることである。そして二点目は、専門用語が多く難解であること、および体内で起こる事象についての内容であるためイメージ等の感覚的理解が難解であることなどから、『内容の修得が難しい科目』であることである。これらの特徴から、本科目では2つの点で工夫を行い、単位修得が困難とならない授業を実施している。

（1）授業資料の工夫

各回の授業では、①『授業スライド』（図1）、②『授業プリント』（図2）、③『まとめプリント』（図3）の3種類の教材を活用している。①については、文章での解説だけでなく、可能な限り図・グラフ・イラスト等を活用することで、感覚的理解を促す教材としている。②については、授業スライドをもとに穴埋め形式で記述して完成する教材とすることで、授業に能動的に取り組むことを促している。そして、③については、各単元の重要ポイントを受講者自身が記述式でまとめる教材となっており、この記述内容について毎授業後の提出を課すことで、毎授業始めに解答させる『復習問題』と合わせて予習・復習を促す教材となっている。また、受講者自身が重要だと感じた部分を自由記述枠に記入するよう促し、重要ポイントをまとめる部分と合わせて、本科目内で活用するだけでなく、後の資格試験等の勉強を行う際に活用できる参考書を自作させることをイメージしている。

（2）評価項目の工夫

本科目では、単位修得上の評価項目を知識・理解を問う『小テスト』に限定せず、毎回の授業において積み重ねる『まとめプリント』及び『復習問題』についても評価対象としている。評価点の配分も分散させることで、コツコツ学修することが得意な学生、集中的に学修することが得意な学生など、多様なタイプの学生が得意な部分で成果を出すことで単位修得に届くよう工夫している（図4）。

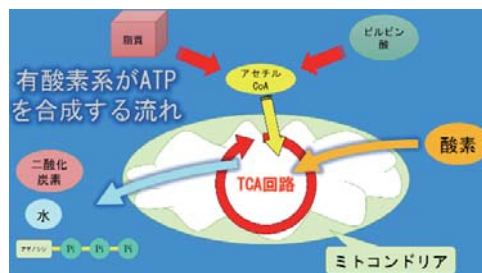


図1 授業資料（スライド）の工夫

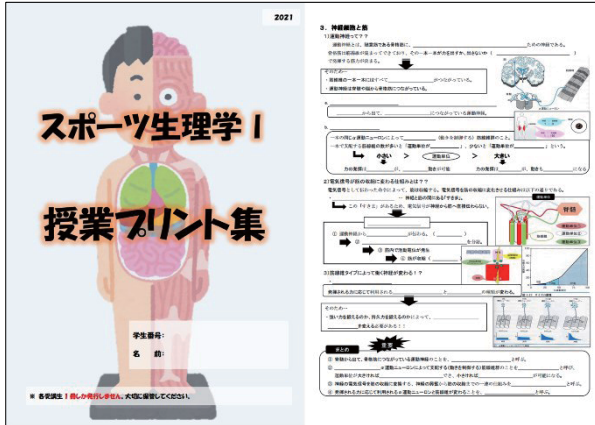


図2 授業資料（授業プリント）の工夫

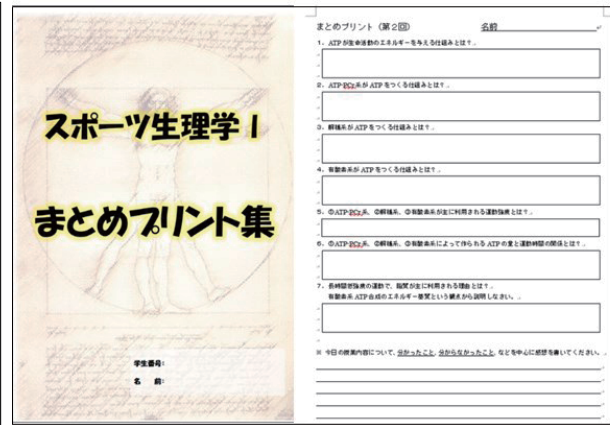


図3 授業資料（まとめプリント）の工夫

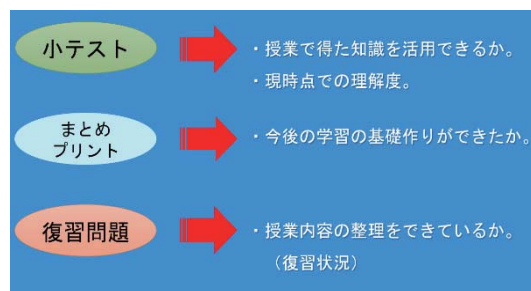


図4 評価項目ごとの観点

2. C-Learning 授業を行う上での目標・試み

上記1. のような特徴を持つ科目であるため、本来であれば対面授業により受講者の反応を見ながら細かな解説を行い、到達度を確認しながら進めていくことが望ましい。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、一部の授業回をC-Learningによる遠隔授業として実施することとなった。しかし、対面授業から遠隔授業へと受講様式が変更することにより授業内容理解および単位修得が困難となつてはならない。したがって、既に様々な工夫を行っている対面授業と同じ流れでC-Learningによる遠隔授業を実施することを試み、受講様式の違いによる受講上の戸惑いが生じないようにすることを目標とした。以下に、実際の『授業の流れ』および『評価と今後の課題』について示す。

3. 授業の流れ

(1) 授業の流れ

①復習問題への回答

C-Learningの「アンケート」機能を利用して、前回授業終了時に配布した復習問題（4～5問）に回答させた（5～10分間）。

②正答確認および前時の復習

C-Learningの「教材倉庫」に復習問題の正答と前時の復習スライドをアップし、前時の授業内容についてあらためて理解を深めさせる（10分程度）。

③本時の学修

C-Learning の「教材倉庫」に本時の授業スライドをアップし、配布済みの「授業プリント」と合わせて授業内容を学修させる（50 分程度）。

④本時のまとめ

授業内容の学修が終わり次第、配布済みの「まとめプリント集」に授業のポイントをまとめ、その後 C-Learning の「アンケート」機能を利用して、まとめ記載内容を提出させた（20 分程度）。

⑤復習問題の配布

授業終了時に C-Learning の「教材倉庫」へ次回授業開始時に回答する復習問題をアップし、次回授業までに復習を兼ねて解いておくよう指示した。

（2） C-Learning 授業における留意点

①授業資料

「教材倉庫」へアップするスライドに関しては、pdf と ppt の 2 種類を準備した。ppt が使用可能な環境の場合は ppt を、難しい場合は pdf を見るよう指示した。ppt はスライドショーで見るとアニメーション機能等を活用することで、グラフやイラストがより理解しやすいよう工夫してある。

②質問・連絡

授業時間中は常に、C-Learning の「連絡・相談」機能から質問を受け付け、即時に対応するよう留意した。また、個別の質問であっても全体への周知が効果的と思われる内容については、質問者が特定できない形で全体へ回答した。

（3） 対面授業からの変更点

報告者は対面授業時から C-Learning の一部機能を活用して授業を実施していたため、C-Learning 授業の実施にあたり変更した点は、上記授業の流れの①～⑤の中で②③のみである。②③についても流れの変更では無く、対面授業ではスライドと合わせて解説を口頭で加えながら説明していたものを、視覚資料のみとした変更である。なおその際に、受講生へ与える情報量が変化しないよう、解説部分をスライドに追記する、補助資料を加える等の工夫を行った。

4. 評価と今後の課題

C-Learning の「学内アンケート」機能を用いて行われた「授業評価アンケート」によると、授業満足度は約 4.3 と全学平均以上となっており、受講生からの評価は概ね良好と思われる。また、表 1 に示した感想・意見（高評価）からも本科目の C-Learning 授業を行う上での目標・試みが達成できたことがうかがえる。一方で、表 2 に示した感想・意見（低評価）にあるように、やはり対面授業に及ばないと感じている受講生も一定数いることが明らかとなり、これから遠隔授業を受講様式の選択肢の一つとして発展させていく上ではさらなる改善が必要と考えられる。

表 1 授業の感想・意見（高評価）

-
- ・オンラインになってもわかりやすい資料や授業形式でとてもよかった。
 - ・どの授業よりもスライドがわかりやすく、とても理解が深まりました。
 - ・まとめプリントなどがあってわかりやすかったです。
 - ・毎時間授業を復習しないといけなかった。
 - ・授業の内容がしっかりと理解することができた授業でした。
 - ・パワーポイントでとても分かりやすく理解することが出来た。
 - ・スライドが見やすくてわかりやすかった。
 - ・覚えることがたくさんあって大変だったけど、この授業に少し興味が湧きました。
 - ・特に毎回の確認テストを次回の授業で解答だけでなく解説もしてくださるのはとてもありがたかったです。
 - ・授業プリントやアンケートでしっかり復習ができました。
 - ・覚えることがたくさんあって大変だったけど、この授業に少し興味が湧きました。
 - ・生理学を通して体の仕組みや現象など詳しい内容が分かった。実際にスポーツをしていてなった症状はこういうことが理由でなっていると分かった。
-

表 2 授業の感想・意見（低評価）

-
- ・オンラインはあまり好きじゃないです。
 - ・対面授業がとても分かりやすくてよかった。
 - ・書くペースが早いと思いました。
 - ・もっとしっかり対面で学びたかった。
-

4. 学生参画型 FD 活動

短期大学

学芸学部

看護学部

人間健康学部

令和3年度 学生参画型FD活動
FD委員会主催 学生の意見を聴く会 (短期大学)

日時 令和3年9月30日(木) 15:30~16:12

場所 会議室3 (本館2階)

出席者:短大FD委員:岡田、廣澤、西川、学生部:上田

廣兼学生部長、学科長(海切、村田、清見)、

学生代表者:教育改善委員(佐野、中崎、今井、桧川、西村、森重)

欠席者:松元副学長

学生による授業評価アンケートの結果に関する授業の改善方法について

資料:学生による授業評価アンケート令和2年度前期・後期の結果公表資料

① 令和2年度学生による授業評価について、学生から以下のような意見があった。

●**教員及び授業について**

○良いこと(継続してほしいこと)

コミ:公正で信頼感が持てる学生対応。個性を大事にした熱意を持った対応。

食物:C-Learningでの授業についても、対面授業と同様の熱意のある指導や対応。

安心して授業に取り組むことができた。

保育:これまでの経験・知識を生かして、質問した内容以外についても熱意を持った対応。

○改善してほしいこと(改善したほうがよいと思うこと)

コミ:予習・復習の時間が少ないので、課題があれば予習・復習に取り組みやすくなる。

食物:急な休講になった場合、HPにも記載されていないことがあり、家を出る前に連絡が来るようにしてほしい。

保育:1回目の授業でシラバスについて説明されるが、C-Learningでの授業や実習の関係でシラバスの内容が変更になった場合、その都度説明してほしい。

科目によっては、シラバスについて説明がない場合もあった。

●**学生自身について**

○良いこと(継続してほしいこと)

コミ:授業を通して新しい専門的な知識・技術を身に付けて、日々の生活に生かしているところ。

食物:遅刻や欠席をしないように学生自身が心掛けているところ。

○改善してほしいこと(改善したほうがよいと思うこと)

コミ:授業の予習・復習時間をもう少し増やすこと。

食物:新しい専門的な知識・技術を身に付けるため、意欲的に学習をすること。

保育:授業の予習・復習時間をもう少し増やすこと。学生自身は分かっているので、

先生方からも注意喚起をしてもらうといいのではないかと。

⇒予習・復習への課題について、実習や土曜日補講などもあるため、学生の負担を増やしたくないという教員側からの意見があった。

② 授業改善のための意見（授業担当者への要望や提案など）は以下のとおりであった。

●教育施設設備について

コミ：授業中の冷暖房の温度について、先生に言いにくい場合もあるので、改善してほしい。

食物：急な休講になった場合、HP掲載以外に、C-Learningでの連絡等をしてほしい
カラーコピーのできる場所を増やしてほしい。

保育：大雨などで休講になった場合、もう少し早く連絡をしてほしい。
冷房が効きすぎて寒い授業もあり、快適な環境で授業が受けることができない。
各教室で温度管理ができるようにしてほしい。

●学生自身について

コミ：私語により迷惑だと感じている人が周りにいるかもしれないということに気付かない学生がいる。

食物：私語を控えるなど、コロナへの意識を高めてほしい。

保育：マスクを付けずに授業に出席する学生がいるため、先生方からも注意をしてもらいたい。

③ その他

●PCの必携化について

- ・家のパソコンが壊れた際に、パソコンの貸出しがあると助かる。
- ・学科によっても状況は違うと思うが、課題などについては学校で作成しているので特に問題はない。
- ・就職してからもパソコンは必要になると思うが、特に現状で問題はない。

⇒学校としても貸出しパソコンの台数を増やすなどして対応していきたいとの意見が教員側よりあった。

●ピアノ練習室について

- ・ピアノの練習について、普段から練習はするようにしているが、試験前などは練習室の使用が増えるため、十分にピアノの練習ができないので、試験日を分けて設定するなどしてほしい。

⇒学科より、鍵盤の貸出しをおこなっているとの説明があった。

令和3年度 学生参画型FD活動
学芸学部FD委員会主催 学生の意見を聴く会

日時 令和3年9月29日(水) 12:30~13:00

場所 第3会議室

出席者:学芸学部FD委員:八島、桑田、山中

学生代表者:教育改善委員(日高、山本、名原、松澤)

1. 学生による授業評価アンケートの結果に関する授業の改善方法について

資料:学生による授業評価アンケート令和2年度後期の結果公表資料

①教員について

【良い点】

- ・熱意や意欲があること。
- ・授業がわかりやすく、丁寧であること。
- ・どのような学生にも平等に対応してくれること。
- ・親しみやすい先生が多く、学生との距離が近い。

【改善点】

- ・シラバスを使って、授業の目標や評価について説明してほしい。
- ・オンライン授業の指示のわかりやすさや内容にばらつきがある。
- ・予習・復習の時間が短いので、課題の内容について検討してほしい。
- ・レッスンについて、学生全体のレベルを考慮しながらすすめてほしい。
- ・非常勤講師との連絡が取りにくい(HBGメールを送っても見てもらっていない)

②学生について

【良い点】

- ・授業に意欲的であること。
- ・グループワークに慣れている
- ・よく練習すること。
- ・学生同士の関係が良好であること。

【改善点】

- ・私語が多い。
- ・教養科目に対する意識が低い。
- ・授業評価アンケート回答率の低さを懸念している(オンライン以後)。

2. 授業や学生生活改善のための意見

①教育施設設備について

- ・エレベーターを増設してほしい。
- ・パソコンの台数や利用可能な場所を増やしてほしい。また、古いパソコンは変えてほしい。
- ・黒板の部屋は残してほしい(教採の模擬授業等で利用するため)。
- ・教室の掃除を小まめにしてほしい(業者に頼んでもらいたい)。

- ・自習室がほしい。
- ・コピー機を増やしてほしい。
- ・休日にも食事を購入できるように、自販機等を置いてほしい。
- ・売店でクレジット決済、バーコード決済ができるとうい。

②教育機器の利用の仕方について

- ・C-Learning のレポート機能の仕様。途中保存できるようにしてほしい。
- ・オンライン授業で用いるツールを統一してほしい。
- ・機器利用に関するマニュアルを作成してほしい。

③その他

- ・非常勤講師との連携を確実にしてほしい。
- ・授業評価アンケートについてフィードバックがほしい。
- ・朝のあいさつ運動はなくてもよい。
- ・フォーマルデイを見直してほしい。
- ・実習着の種類を増やしてほしい(トレーナーより薄手の長袖)。

令和3年度 看護学部アクティブ・ラーニング学生参画活動報告

1.FD/アクティブ・ラーニング委員会について

- 1) 目的:教職員組織によるアクティブ・ラーニング推進委員会と連携協働し、学生の主体的学びを促進するために、学生の意見を集約すると共に授業経営に参画する。
- 2) 役割:授業に対する学生のニーズを情報収集しFD/AL 委員会へ提供する。
学生の主体的学びを促進するための検討を行う。
学生に対して主体的学びの動機付けを行う。
教員とともに授業経営に参画する。

2.FD/アクティブ・ラーニング委員会 (AL 支援教員:出田聡子, 加藤重子)

3 年次生: 赤坂 さくら, 奥内 香菜, 中井 風茄 (3 名)

主な活動:委員会開催、学年をこえた学びの促進(勉強会など)の企画などであるが、今年度は新型コロナウイルスのため、各学年から委員を募って会議を持ち活動することがほとんどできなかった。

3.今年度の主な活動について

- 1)先輩から入学間もない1年生に「勉強の仕方について」伝える。

令和1年までは、看護関連領域総合演習の講義科目内で、入学間もない1年生に毎年、参画委員の先輩が小グループに分かれて各グループを担当するスタイルで、普段の学習方法、講義ノートの取り方のコツ、試験対策などを実際に使っているノートなどを見せながらレクチャーして実施してきた。

令和2年度より新型コロナウイルスの感染症対策で遠隔講義が多くなり、対面での小グループでのレクチャーができなかったため、C-Learningでのレクチャーとなった。

令和3年度からは看護関連領域総合演習の講義科目内で実施する時間が削除された。

3年生の委員は、前年の先輩が事前に1年生から募集した質問へ回答する内容も踏まえて「勉強の仕方について」のPowerPoint資料を作成した。主な質問内容は学生生活について、勉強の仕方や講義ノートの取り方のコツ、試験について、実習について、コース選択についてなどであった。3年生の委員は自分たちが困った体験を紹介しながら、どうやって乗り越えたかを丁寧にパワーポイントにまとめた。

1年生に「勉強の仕方について」のPowerPoint資料を提示する方法について、教育課程委員長に相談し、看護統合セミナーIのC-Learningの教材倉庫にPowerPoint資料を入れてニュースを上げさせてもらう事に決まった。1年生チューター主任の浅香先生に報告し許可と同意を得た上で看護統合セミナーI担当の迫田先生に依頼して7月11日にPowerPoint資料を公開した。

- 2)後輩との勉強会を開く。

大雨による休講、補講、試験などで時間割の変更があった事と、新型コロナウイルスの感染症対策で遠隔講義が多くなった事とで実施出来なかった。

3)先輩から実習についての話しや学習方法についての話しを聞く。

大雨による休講、補講、試験などで時間割の変更があった事と、新型コロナウイルスの感染症対策で遠隔講義が多くなった事とで実施出来なかった。

4)活動後の学生の感想

3年生の感想:

1年生に対して勉強の仕方や学生生活について伝える PowerPoint 資料の作成は、委員以外の学生からの意見も取り入れて作成出来た。対面で説明できない分、大切な部分が簡潔に伝わるような工夫をすることができた。

学生参画アクティブ・ラーニング委員の募集について、学生全体に声を届ける事が出来ていなかったと感じた。

天候不順や新型コロナウイルス蔓延の影響があり、令和1年まで出来ていた活動が昨年と今年の2年間は出来ていない。次年度以降もこのような学生参画活動が出来ない状況が続くことも考えられるため、今後はC-Learningやteamsなどを活用した、人が集わなくてもできる活動方法についても考えて実践出来たら良いと思っている。

1年生の感想:

勉強の仕方が分からない時に「勉強の仕方について」の PowerPoint でのアドバイスを参考に学習してきたおかげで全ての試験を合格することが出来、理解を深めることが出来たので感謝しかありません。1年生の科目は2年生からの学習の基礎ですので、春休み中にしっかりと復習して遅れないようにしていきたいと思いました。

「勉強の仕方について」の PowerPoint を見て、レポートを提出日に間に合うように出すことや、重要だと思うことはメモして自分の頭に入れていくことが大切だと思って実践した。

「勉強の仕方について」の PowerPoint を見て、選択問題、記述問題などのそれぞれの勉強の仕方やテストの乗り越え方を知ることが出来た。2年生になって勉強する時にももう一度見返して頑張ろうと思いました。貴重な資料ありがとうございます。

学生参画型 FD 活動の取組みについて

人間健康学部

令和3年度の授業について意見を聴取するため、学生参画型 FD 委員会を後期終了後に開催した。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、昨年度に引き続きメールでの開催とし、学生教育改善委員の4名に参加をお願いした。また、人間健康学部 FD 委員の教職員2名も参加した。

(1) 対面で実施された授業に対する意見

- ・今年度は学生が少人数の講義ばかりで、教員と学生の双方向のコミュニケーションが取れたため、内容の濃い講義を受講できたと思っています。
- ・実技の際に間隔をあけたり、少人数のグループで行ったり工夫をしていただいたので安全に行うことができました。
- ・直接質問をできてすぐに良い返答をもらえるので考える時間もたくさんとれた。

(2) C-Learning で実施された授業に対する意見

- ・質問などが気軽にできた
- ・PDF など教材倉庫の見直しなどができたのでよかったです。
- ・グループでの話し合いでは不参加の人もいて少し困った。

(3) 学生教育改善委員からの意見を受けて

今年度は対面授業と C-Learning を利用した遠隔授業が同じ程度の割合で実施されたが、どちらも肯定的な意見が多かった。しかしながら、一部改善が必要とされる意見が寄せられたため、学部内で共有し、改善に努めていきたい。

(4) 今後の課題

今年度も新型コロナウイルス感染防止対策のため、学生参画型 FD 委員会を対面で開催することができなかった。新型コロナウイルスの感染状況にはよるが、来年度は対面で開催し、学生から直接意見を聞く機会を設けたい。

5. ラーニング／オープン・コモンズ利用状況 及び ICT 支援員の取組

阿賀キャンパス

オープン・コモンズ活用状況と ICT 支援員取組の報告

看護学部 看護学科 若狭 美乃里

長東キャンパス

ラーニング・コモンズ活用状況と ICT 支援員取組の報告

短期大学・学芸学部 弥富 純子

坂キャンパス

坂キャンパスにおける ICT 支援室の取組

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 鬼塚 純玲

オープン・コモンズ活用状況と ICT 支援員取組の報告

看護学部看護学科 若狭 美乃里

1. 期間 : 令和3(2021)年4月～令和4(2022)年2月
2. 場所 : 阿賀キャンパス2号館4階(オープン・コモンズ)

◇利用状況

	利用回数	利用人数	利用時間	BIGPAD 利用	ノートPC 貸出
利用状況	147回	842人	408時間	35回	893回

◇利用内訳

	講義	セミナー	実習	国試勉強	地域貢献	会議	その他	合計
利用回数	3回	8回	72回	50回	0回	11回	3回	147回

3. **取組** : 今年度も新型コロナウイルスの断続的な感染症拡大により、5、6月は対面授業と遠隔授業を繰り返し、図書館は授業体制に伴い開館を実施した。7月からは継続して対面授業が行われ、マスクの着用、手指の消毒、ソーシャルディスタンスの確保、換気など感染防止対策を徹底し延長開館を実施した。オープン・コモンズでは、グループワークの報告会や実習の振り返り学習、ゼミ単位の研究指導として、また後期になると4年生がグループ単位で国試勉強の場として多数利用された。しかし2022年1、2月の急速な感染症拡大により遠隔授業に移行され、臨床実習は、オープン・コモンズのBIGPADを活用し、モニターを通して学生一人一人の顔や音声を確認しながら指導が行われた。利用回数147回842人、前年度比利用回数20%増、利用人数は26%増となった。



グループワーク報告会の様子



学生一人一人に指導している様子(臨地実習)

4. ICT 支援員の取組(阿賀)

学生には論文作成時の表図についての質疑応答をした。教員学生には、遠隔授業時の機器やC-Learning利用についての説明を実施した。オンライン会議を行う設備の教室が増え、セッティングやトラブル対応も増加し、オンライン会議向けアプリの特徴や使い分けの説明も行った。支援員室のノートパソコンの貸出は596回、学外用PCの貸出は17回(2月末)。

ラーニング・commons活用状況と ICT 支援員取組の報告

短期大学・学芸学部 弥富 純子

1. 期間 : 令和3(2021)年4月～令和4(2022)年2月
2. 場所 : 長束キャンパス2号館2階(1407教室)

◇利用状況

	利用回数	利用人数	利用時間	BIGPAD 利用	ノートPC 貸出
利用状況	231回	842人	359時間	191回	1,356回

◇利用内訳

	講義	セミナー	勉強会	会議	合計
利用回数	98回	83回	21回	29回	231回

3. **取組:**感染防止対策として、席数7席に半減・机の消毒・換気に注意喚起を行いながら利用継続した。利用回数は前年比15%減となり少人数で利用された。

子ども学科の伊藤駿講師のゼミが1年間続けられ、卒業論文制作が行われた。図書館で所蔵している「切抜き速報教育版」(ニホン・ミック)の1年分を全員で読み、全国の教育関係の新聞記事から、興味のあるテーマを抽出した。新聞記事はEXCELに時系列で整理し、ゼミ生同士の関心を共有した。前期は卒業研究テーマ探しとし、後期は整理した資料で文献を収集して研究を深め発表まで完成させた。短期大学食物栄養学科では、萱島隆之教授のもとと食品表示検定の勉強会が有志で続けられた。過去の問題を読みほどこいては予習でわかりづらかったところは集中して聞き、同じ目標に向かって勉強するゼミ生の姿から刺激を受けるピアの効果が高まる取り組みとなった。



子ども学科卒業研究



食物栄養学科勉強会

4. ICT 支援員の取組(長束)

C-Learningのみならず、Zoom, Teams, Meetなどの利用指導を含めて、遠隔授業を支援した。12月には広島県 ICT 補助金遠隔授業教室改修について説明会を実施し、模擬授業等で展開された。システムの支援員室のノートパソコンの貸出は2,223回(2月末)となり、活発に利用された。学外貸出パソコン(貸出84回)の活用も始まり、学生教員の要望に応えた。

坂キャンパスにおける ICT 支援室の取組

人間健康学部 スポーツ健康福祉学科 鬼塚 純玲

1. はじめに

昨年度、坂キャンパスでは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため C-Learning を利用した授業が多く実施されることとなり、パソコンの貸し出し件数や C-Learning に関するサポート件数が増加した。今年度は対面と C-Learning のハイブリッド型で多くの授業が展開されたため、昨年度と比較してパソコンの貸し出し件数や C-Learning に関するサポート件数に変化が見られるかどうかを調査した。

2. パソコンの貸し出し件数

表 1 に 2020 年度と 2021 年度のパソコン貸し出し件数を、図 1 に貸し出し件数の月毎の推移を示した。4～5 月を除いては、2021 年度の方が貸し出し件数は減少しており、昨年度よりも対面授業の割合が増加したことが要因ではないかと考えられる。

表 1 2020 年度および 2021 年度のパソコン貸し出し件数

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月
2020	22	1	214	445	164	135	641	426	252	63
2021	104	81	101	203	43	84	453	401	252	24

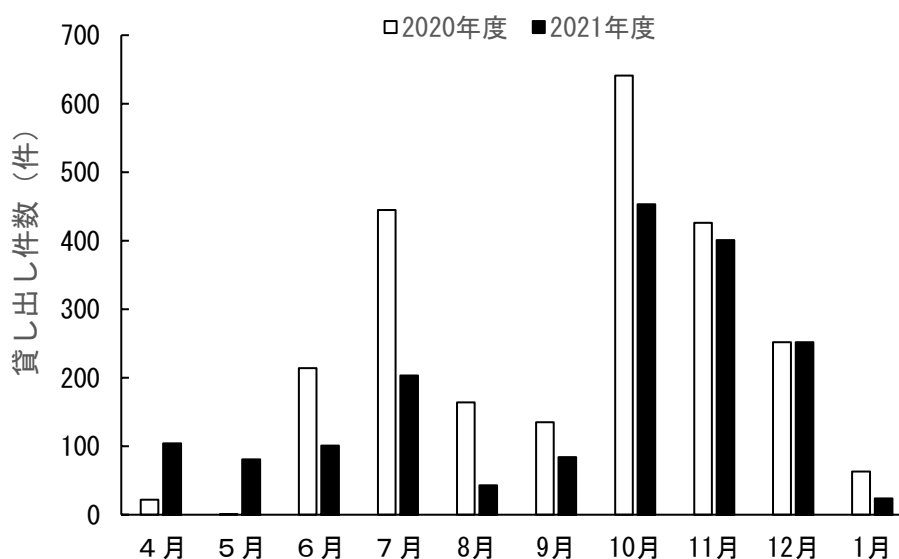


図 1 パソコン貸し出し件数の推移

次に、2020年度と2021年度のICT支援員によるサポート件数を表2に、C-Learningに関するサポート件数を表3に示した。昨年度は、授業でC-Learningを利用する機会が大幅に増加したことに伴い、教職員においてC-Learningの利用方法に関するサポート件数が増加したが、今年度は昨年度で利用方法を理解したためか、教員におけるサポート件数が大幅に減少していることが明らかとなった。

表2 2020年度および2021年度のICT支援員によるサポート件数

	2020年度				2021年度			
	教員	職員	学生	計	教員	職員	学生	計
4月	101	24	32	157	54	51	53	158
5月	67	23	8	98	27	55	35	117
6月	64	41	30	135	24	65	40	129
7月	31	51	44	126	27	56	35	118
8月	36	53	20	109	31	58	29	118
9月	32	52	62	146	36	49	46	131
10月	40	58	45	143	33	52	51	136
11月	41	41	38	120	35	33	55	123
12月	40	51	21	112	16	39	32	87
1月	39	34	31	104	26	41	39	106
計	491	428	331	1,250	309	499	415	1,223

表3 C-Learningに関するサポート件数

	2020年度				2021年度			
	教員	職員	学生	計	教員	職員	学生	計
4月	66	5	16	87	18	16	13	47
5月	40	1	5	46	12	1	10	23
6月	12	16	7	35	4	9	4	17
7月	8	7	7	22	6	6	4	16
8月	14	9	2	25	9	9	7	25
9月	14	7	4	25	9	6	0	15
10月	13	3	5	21	6	2	9	17
11月	8	2	9	19	7	2	11	20
12月	13	4	6	23	1	2	4	7
1月	21	1	4	26	14	1	6	21
計	209	55	65	329	86	54	68	208

6. アクティブ・ラーニング実施状況

アクティブ・ラーニング実施状況調査結果

短期大学

学芸学部

看護学部

人間健康学部

アクティブ・ラーニング実施状況

1. 短期大学FD委員会

(1) アクティブ・ラーニング導入実績

短期大学では、全科目 269 科目中（セミナー、卒業研究、学外実習、不開講科目を除く）、217 科目について回答が得られた。最も用いられたアクティブ・ラーニングの手法は「コメントペーパー、ミニッツペーパー」（141 科目、1404 回）であり、「情報収集と整理」（136 科目、609 回）、「実験・実習」（57 科目、563 回）「ディスカッション」（93 科目、524 回）と続いた。実施回数は昨年度と比較し、大幅に増えた。今年度も新型コロナウイルス感染拡大防止のため、C-Learning を利用した遠隔授業が多数実施されたが、多く用いられるアクティブ・ラーニング技法に大きな違いは見られなかった（図 1）。

(2) 普段の授業形態

普段の授業形態に関する回答においては、板書が中心の科目（46 科目）に比べ、パワーポイントなどパソコンでの内容掲示が中心の科目（94 科目）が多かった。プリントを配布し書き込みさせる科目（122 科目）は、ノートを準備して書く（26 科目）より多かった。AL 室や ICT 機器を利用して実施する科目（35 科目）においても補足的にプリントを利用している科目が多いようである。

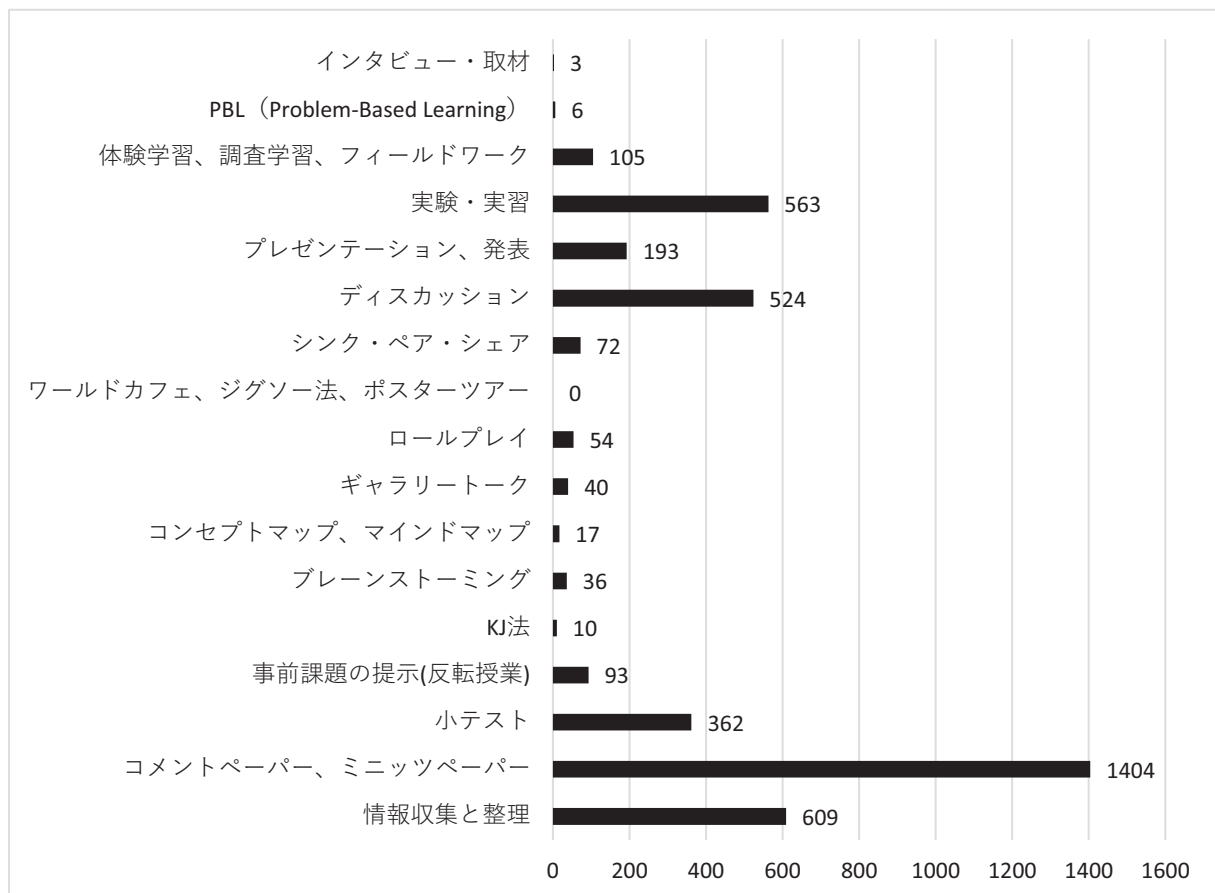


図 1 短期大学でのアクティブ・ラーニング技法の実施状況（回数）

2. 学芸学部 FD 委員会

(1) アクティブ・ラーニング導入実績

学芸学部では全科目 531 科目中、311 科目について実施状況への回答を得られた。アンケートへの理解が進み、入力方法などにも慣れたためか、昨年度より回答数が約 100 件増加した。多く用いられるアクティブ・ラーニング技法は「情報収集と整理」(118 科目)、「コメントペーパー、ミニッツペーパー」(92 科目)であった。本年度は昨年度比で「ディスカッション」(76 科目)や「プレゼンテーション・発表」(68 科目)の増加も見られた。実施回数では、昨年度大幅に回数を減らした「実験・実習」(1517 回)が最も多くコロナ感染症への注意を払いつつ本来の授業形態へ近づけようとする工夫が見られた。「コメントペーパー、ミニッツペーパー」(1008 回)、「小テスト」(346 回)、「事前課題の提示(反転授業)」(318 回)と続き、これらの授業方法が学芸学部において定着していることが伺える。

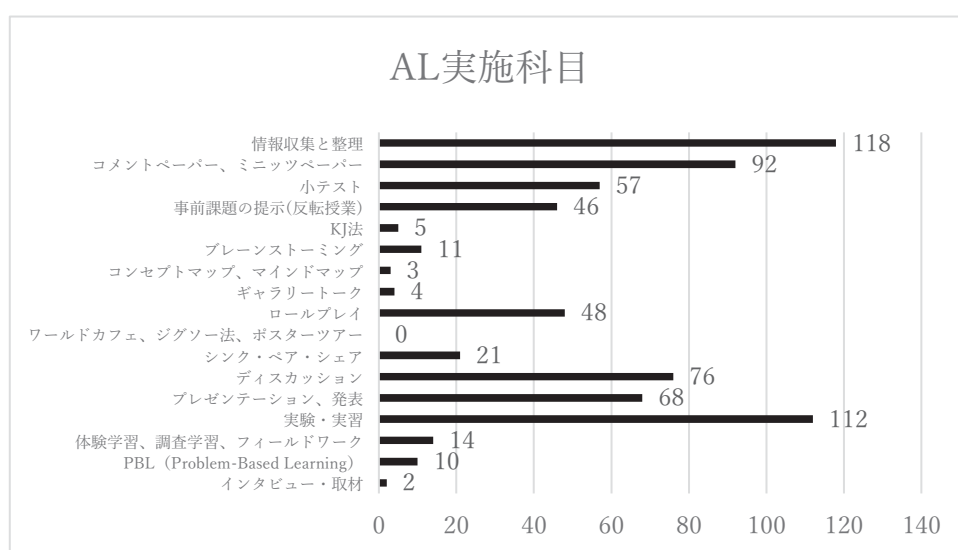


図 1 : R3 年度学芸学部 AL 授業実施科目数

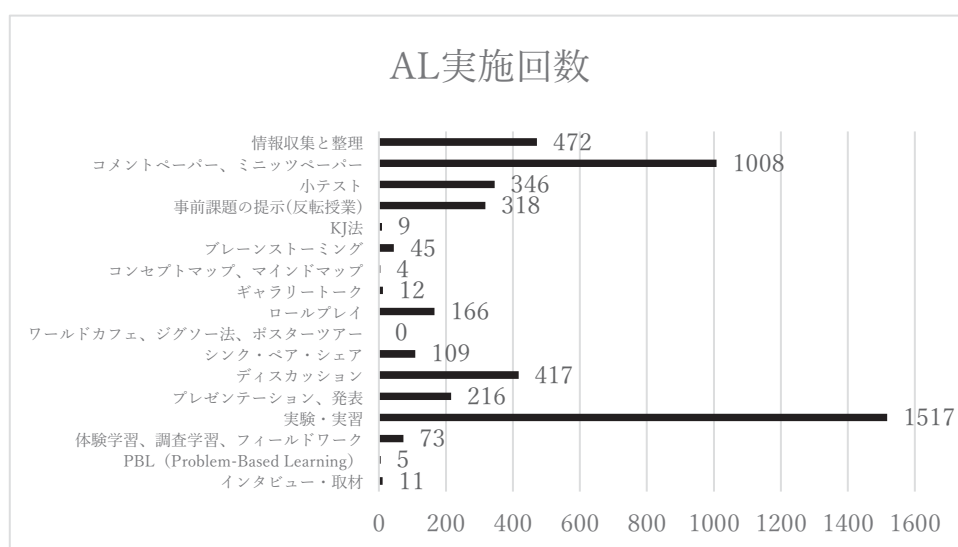
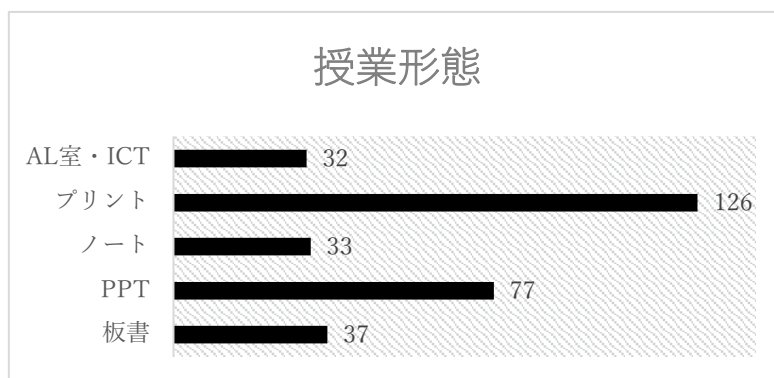


図 2 : R3 年度学芸学部 AL 授業実施回数

(2) 普段の授業形態

普段の授業形態に関する回答においては、パワーポイントなどパソコンでの内容提示が中心の科目(77科目)が多い。補足的にはノート(33科目)よりもプリント(126科目)を利用している授業が多い。また、コロナ禍のオンライン授業を経てAL室やICTの利用(103科目)も昨年度比(32科目)で大幅に増加した。



3. 看護学部FD委員会

177科目中の回答は48科目であった。

授業の形式:

科目数(%)

- | | |
|--------------------------|----------|
| 1. 黒板やホワイトボードでの板書が中心 | 7(14.5) |
| 2. パワーポイント等パソコンでの内容提示が中心 | 30(62.5) |
| 3. ノートを準備して書くよう指導 | 28(58.3) |
| 4. プリントを配布し書き込みさせる | 31(64.5) |
| 5. AL室やICT機器を利用して実施 | 13(29.1) |

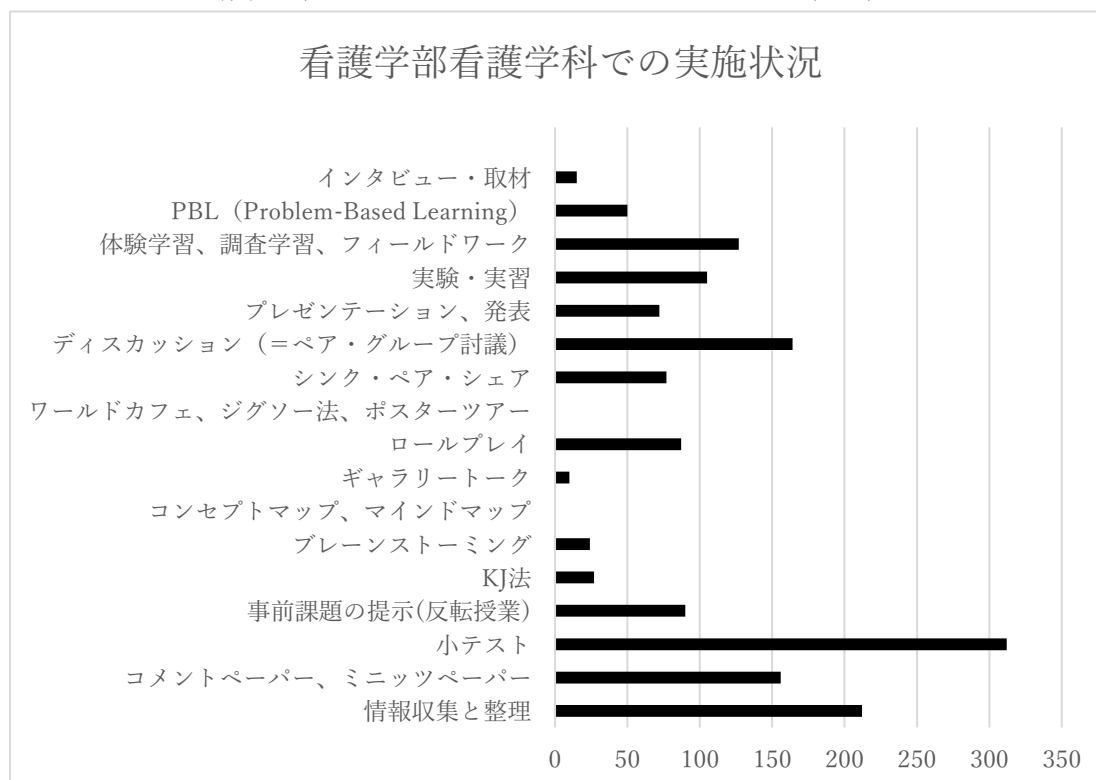


図3：看護学部でのアクティブ・ラーニング技法の実施状況

看護学部看護学科でのAL技法に関しては、48科目(27%)の回答が得られた。本アンケートの回答科目における座学を中心とした講義科目の割合は7割で、他は演習が中心であった。全体の実施回数として最も多かったのは、「小テスト」であった(図3)。次いで多かったものは「情報収集と整理」であり、さらに「ディスカッション」、「コメントペーパー・ミニッツペーパー」、「体験・調査学習」の順にそれぞれの技法が多く使用されていた。昨年4位であった「反転授業」はこれらに次いでいた。これら6技法の使用事例が全体として目立ち、約7割を占めていた。看護学部では2年生後期以降は多数の科目で実習や演習が行われ、実質的に臨床に則したアクティブ・ラーニングを行っており、アンケート結果に見られる大方の技法をこれまで継続して実施してきている。ただ、本学部では昨年同様ワールドカフェ・ジグソー法・ポスターツアー、コンセプトマップはほとんど使われておらず、またブレインストーミングやインタビュー、ギャラリートーク、KJ法は全体から見るとマイナーな手法となっていた。この傾向は前年までの傾向と同様で、本学部学科の特徴であると考えられる。

4. 人間健康学部FD委員会

(1) アクティブ・ラーニング導入実績

人間健康学部の今年度開講科目(165科目)中、最も用いられたアクティブ・ラーニング技法は「コメントペーパー、ミニッツペーパー」(48科目、465回)であり、「情報収集と整理」(63科目、427回)、「小テスト」(55科目、331回)、「事前課題の提示(反転授業)」(43科目、264回)、と続いた。順位に入れ替わりはあったものの、今年度も多く用いられるアクティブ・ラーニング技法に大きな違いは見られなかった(図4)。

(2) 普段の授業形態

普段の授業形態に関する回答においては、プリントを配布し書き込みさせる科目(40%)が最も多かったが、パワーポイントなどパソコンでの内容提示が中心の科目(30%)およびAL室やICT機器を利用して実施する科目(27%)、ノートを準備して書くよう指導している科目(24%)も多く、ノートやプリントを利用しながら、ICT機器を活用している科目が多いようである。

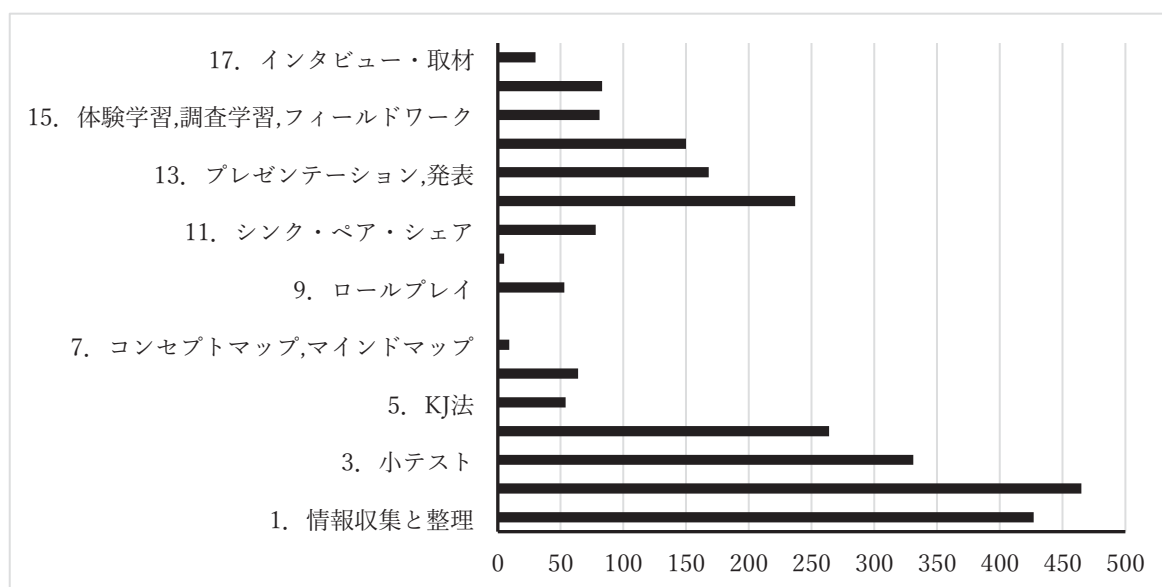


図4 人間健康学部でのアクティブ・ラーニング技法の実施状況

7. おわりに

広島文化学園大学・短大 FD 委員会 委員長 山内京子

今も続くコロナ禍の中（第 6 波）、令和 3 年度も前年度に引き続き新型コロナウイルスに悩まされる一年でした。それでも可能な限り全学的に対面授業を実施、その足りない部分を C-Learning で補ってきました。キャンパス内に閉塞感が漂う学修環境の中でも、各キャンパスでは様々な取組み・工夫がなされました。その実際は本報告書の中に、具体的な授業風景・演習の様子等として記載されています。

学生サイドの報告内容としては授業評価アンケート結果に、様々な取組みについての受け手側の意見・感想があがってきています。本学での 2 年間・4 年間の学修生活を保障するための組織的な仕組みがどの様な形で、機能しているのか、今後の課題となる点や改善点等々、この結果分析から、新たな取組みの視点を探り、次年度に向け委員会では調整していきたいと考えています。

本学独自の学生の主体的な活動としての学生参画型 FD 活動も、年を重ねる事に、その内容が洗練されてきています。各キャンパスでのアクティブ・ラーニングの実施・展開状況も、それぞれのキャンパスにより、その特徴ある試み、修練度が増してきています。歴史的にも、これまでにない形での高等教育機関としての学修環境をどの様に調整し、限られた学修環境で、学生の学びの質を保証することができるのかを、本委員会としては引き続き検討していきます。

広島文化学園大学・短期大学FD委員会規程

(目的)

第1条 広島文化学園大学(以下「大学」という。)学則第3条及び広島文化学園短期大学(以下「短大」という。)学則第3条の規定に基づき、授業内容及びその方法の改善を図り、アクティブ・ラーニングを推進し、教育の充実及び質向上を目指すために、大学・短大FD(ファカルティ・ディベロップメント)委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(組織)

第2条 委員会は、委員長及び各学部・学科・研究科教員及び事務職員から選任された委員をもって構成する。

2 前項の委員長及び委員は、大学及び短大の学長がこれを任命する。

3 各学部・短大に、当該学部・学科及び研究科の委員からなる学部・短大FD委員会を設ける。

4 各学部・短大FD委員会に、それぞれ委員長を置く。

(任期)

第3条 委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。欠員が生じた場合の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営)

第4条 委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員・学生代表者の出席を求め、意見を聴取することができる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長の指名する委員がその職務を代行する。

(所掌)

第5条 委員会は、大学及び短大のFD活動及びアクティブ・ラーニングの推進が持続的に実行されるよう、次の各号に掲げる事項を取り扱うものとする。

(1) 教員の教育活動改善のための方策に関する事項

(2) 講演会・研修会等の企画・実施に関する事項

(3) 学生の授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項

(4) FD活動に関する情報収集と提供に関する事項

(5) アクティブ・ラーニングの企画・実施及び評価に関する事項

(6) アクティブ・ラーニングに関する情報収集と提供に関する事項

(7) ティーチング・ポートフォリオに関する事項

(8) その他、学長の諮問する事項

(報告)

第6条 委員長は、委員会の議事及び結果を教学支援センター会議に諮ったのち、教授会に報告しなければならない。

(その他)

第7条 この規程に定めるもののほか、必要な事項は委員長が別に定める。

附 則

1 この規程は、平成30年9月1日から施行する。なお、広島文化学園大学FD委員会規程、広島文化学園短期大学FD委員会規程及び広島文化学園大学・短期大学アクティブ・ラーニング推進委員会規程は廃止する。(組織改編に伴う改正)

2 この規程は、令和2年4月1日から施行する。(第5条第1項に7号を追加したことに伴う改正)

編集委員

広島文化学園大学・短期大学 FD 委員会

委員長	看護学部看護学科	山内	京子
副委員長	看護学部看護学科	佐藤	敦子
	学芸学部子ども学科	八島	美菜子
	人間健康学部スポーツ健康福祉学科	房野	真也
	食物栄養学科	岡田	正浩
委員	法人事務局	安藤	充昭
	大学・短大事務局	湧田	耕辰
	看護学部看護学科	中村	哲
	学芸学部子ども学科	小笠原	文
	人間健康学部スポーツ健康福祉学科	鬼塚	純玲
	食物栄養学科	江坂	美佐子
	呉 阿賀キャンパス学生部	河本	紀子
	広島 坂キャンパス学生部	堀本	かえで
	広島 長束キャンパス学生部	上田	美由紀
	広島 長束キャンパス図書館	弥富	純子

2021 年度 大学・短期大学 FD 委員会アクティブ・ラーニング推進報告書

発行年月日 2022 年 3 月 30 日

発行 広島文化学園大学・短期大学 FD 委員会

編集 広島文化学園大学・短期大学 FD 委員会

〒737-0004

広島県呉市阿賀南二丁目 10 番 3 号

広島文化学園大学 呉 阿賀キャンパス内

電話 0823-74-6000

印刷 青木印刷株式会社

住所 広島県呉市安浦町内海北二丁目 1 番 6 号

電話 0823-84-2104